
レイスタイルの遊び人

つんどら

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

レイスタイルの遊び人

【NZコード】

N1876W

【作者名】

つんざり

【あらすじ】

今日も今日とてギルドメンバーと馬鹿騒ぎ、していた筈が　こ
こはどこかな？

プレイしていたMMORPG・レイスタイル、その千年後の世界
に飛ばされた遊び人（ジョブ的な意味で）の女の子（プラス幼馴染）
が死なない程度に頑張るのんびり冒険譚。わりと最強系、そして僕
っ子です。

人物紹介・設定集

予備知識と言うか。隨時追加します。

レイスタイル・オンライン

MMORPG。VRが流行する昨今では珍しく非体感型。操作は脳波感知のヘッドホン型コントローラー、文字入力のみキーボード使用。

キャラクターは3頭身で可愛いが、背景やモンスター、オブジェクト等はリアルを追求。勿論可愛い系のモンスターも存在するにはする。

コンセプトは「可愛さとリアルさを追求した理想郷RPG」。

プレイヤー

リノ L v1000 猫妖精族 ケット・ジール 遊び人

中の人：佐原理乃（16）

レイスタイルは初期（サービス時）からプレイしている。インド

ア派。廃人。

僕っ子、やや性格に難あり。

ギルド【アルテマ】所属。

レオ ?

中の人：?（16）

リノの幼馴染。

イロハ・二ホヘト L v1000

ドラゴノイド
竜人族 マジシャン
魔術師

ハイランダ 1人めの至高人にして最強の男。物理魔法混合の特攻型魔術師。

その他（登場順）

レータ（10） コボルト

氣弱だが勇敢な所もやはある。懐っこい。
柴犬系の顔。

ハンシン 白虎

リノのペット、四神の1柱。

ヒバリ 朱雀

同じく。

ガメラ 玄武

同じく。

ギャラドス 青龍

同じく。

カンドタ 大悪党

無法者出身、リノのペット。

元怪盗。

パンドラ 錬金術師

無法者出身、リノのペット。

元キメラ研究家。

イット

死神道化師

リノのペット。元モンスター。怖い。

ライドウ

混沌召喚師

リノのペット。性格が悪い。

ウハル（19）

コボルト

にこやかで底知れない。しかし友好的。
サモエドっぽい。

ヴィックル LV682

狼人族 ヴィルフ
バスター

師匠ことイロハ・ニホヘトのペット。義理堅く眞面目だがたまに面
倒くさがる。

レイクル 猫人族 ヴィキャット

イロハのペット。ヴィックルとの付き合いは長いらしい。

リーゼ・ディヴァイン 半神族 アーク
ISMのまとめ役。文字通り天上人である。

ノッダル 牛頭族 ヴィタウロス

牛頭一家、父。

アガ 牛頭族 ヴィタウロス

牛頭一家、兄。

ホイシュ 牛頭族 ヴィタウロス

牛頭一家、妹。ヴィックル愛。

ヤンバル（銀色）

クイナ（金色）

ランバード。リノのペット達。

ヴィヴィアン 泣き女 バンシー

リノのペット。

ゼディー・ギス・ガーズ・レーベルント

人間族 ヒューマン

伯爵家嫡男。

放蕩息子。

人をからかうのが好き。

はじまりの遊び人

科学技術の発展によりVRゲームが一般的となつた現代。PCの操作も脳波を感知する事で簡単になり、さらには自らの体でプレイする感覚を楽しめるVRMMOが流行している。そんな中“色物ゲー”と揶揄されるMMORPG、レイスタイル・オンラインをプレイし始めて6年が経つ。

レイスタイルは、かつて流行ついていたタイプのオンラインゲームをそのまま進化させたようなゲームである。操作はマウスとキーボードから脳波感知式に変化したが、VRMMOのように自ら入り込むのではなく画面を見て操作する。グラフィックは3Dだが、リアルな等身大キャラクターではなく3頭身のデフォルメされたキャラクターが可愛らしい。しかしキャラクター以外は恐ろしくリアルで、アンデッド系モンスター等は頭身こそ3頭身だが、そのまま映画に出られそうだった。

そんなレイスタイルをプレイしていたら、突然意識が途切れた。

目が覚めてから十数分、この奇妙な状況が終わらないものか、と蒼髪に金色の目の少女はそっと目を閉じ、こめかみを指で押して眉を顰めた。

広がるのは荒野、ほつほつと延びた草は枯れたり枯れていなかつたりで、動物の姿は近くには無い。空には何匹か鳥も飛んでいるが、見たことの無い鳥だ。遠くには森らしき縁の線も見える。

とりあえず手慰みに、手にしたリコートを指で鳴らしてみる。ゲームのエフェクトそのままにカラフルな音符が散つて、大体3メートルのあたりで消える。そこまでが効果範囲なのだろう。

彼女の名前は、リノ。つい先程まではPCの画面に向かい、ギルドメンバーたちと相も変わらず馬鹿騒ぎに興じていた、筈だ。

「VRにバージョンアップしたという可能性は……、無いよね」

レイスタイルの開発者たちは、仮想現実よりも理想郷を目指した。愛らしいキャラクターがとてとてと歩き回る仕草がいいのであって、中に入るのは嫌だそうだ。リノもVRMMOをプレイした事はあるが、ロリー・タフアッシュヨンの愛らしいプレイヤーが思いきりがに股で歩いているのを目撃した事がある。確かにあれは気持ち悪かつた。きっと開発者もその手のプレイヤーを見たのだろう、とリノは思う。

「……とりあえず、レオを探そつか」

リノが現実なのか、あるいはバーチャルのかも分からぬ。けれど彼女はとりあえず、現実世界でも隣家に暮らし、ゲーム内でも殆どペアでいた幼馴染を探す事にした。軍服のような蒼い上着に紺のミニスカート姿で、べれんべれんと適当にリコートを鳴らしながら歩き出す。他の音があまり聞こえない荒野が、少し心細いからだ。独り言のネタも尽き、無言でリコートを搔き鳴らす。演奏スキルを体が覚えているのか、ほとんど無意識ながらメロディーを奏でている。その手の動きが段々激しくなり、やたらと激しい旋律を奏で始める。次第に、リコートからどす黒い波動と音符が放たれ始めた。

「ギュイツ！」

「んあ？」

奇妙な声が混ざり、振り向く。其処には茶色の草に倒れ、口から血を吐いた鼠の死体があつた。気持ち悪くなつたが、とりあえずしゃがんで覗き込む。

「……ああ、スキルが発動したんだ」

しばし悩んだ後、再び立ち上がる。ゲームプレイの時と同じように脳裏にスキルを思い浮かべると、思惑通りのスキルが発動する。『死者蘇生』の文字が脳裏に走り、掌から迸る光と共に、MPが消費される。その感覚は始めてのもので、少し目をぱちくりとさせた。

特殊技能のひとつである『死者蘇生』は、HPが0になつた者を1分以内なら蘇生できる、というスキルである。似たようなスキルが神官の『再生』だが、そつちの方は死ぬ前に掛けなければ効果がない。

特殊技能はレベルカンストとクラスコンプリートその他諸々の条件を満たした者至高人にならなければ習得できない。全部で200種あり、攻撃・回復・防御を始めとして創造・製作など多岐に渡るバランス崩壊スキル、及びお遊びスキルだ。言わば茨の道を乗り越えた者達へのご褒美で、開発曰く“愉快なスキル”が揃っている。

ただしもう一度やれと言わされたら遠慮したいような鬼畜クエストを200もこなさなければならない。筋金入りの廃人揃いである至高人達も、口を揃えて「もうやらん」と言う程だ。

「すまないね」

何がなんだか分からぬ様子の鼠に一応謝り、リノは再びリュートを鳴らしながら歩き出す。殺害してしまった事に罪悪感はあるが、生き返らせたのでプラマイゼロに落ち着いたようだ。

彼女は尤も扱い辛いと言われるジョブ、遊び人である。遊び人は言うものの、楽しませる職業といったクラスが多い。

ジョブはいわゆる職業で変更は出来ないが、クラスはクエストなどで習得でき、それぞれ使用武器やスキルが異なるがいつでも切替できる。ひとつの中には5、6個のクラスがあり、戦闘などで練度を上げるとそのクラスのレベルが上がり、スキルやアビリティを習得できる。

つまり系統の同じ職業の中でクラスチェンジできる、という仕様である。

クラス習得クエストはレベルと共に解禁されていき、LV900で一応全てのクラスが手に入るようになる。そして全クラスのレベルを200まで上げると、晴れてクラスコンプリートとなる。

それだけでも恐ろしく長い道のりだが、それでもクリアしたプレイヤーは20人弱存在する。ハイランダー至高人の数よりは多い。数としてはやはり前衛職が多く、後衛職が少なめだ。

クラスごとに装備を用意しなければならなかつたりもするため、金銭的にもあまり手が出ないという者が多い。コンプリートの先にある至高人は確かに魅力的だが、まさにハイリスクハイリターン。そもそも辿りつくまでに大抵が挫折する。

暫くリュートでモンスターを寄せ付けない効果のある『不死人の鼻歌』を奏でつつ歩いていくと、何やら遠くに建造物らしきものが見えた。

「お、第一村人かな」

リュートを片手に持つて軽く駆け出す。リノの種族は猫妖精ケット・シーで、敏捷ステータスはかなり高い。風を切つて駆け出すと、現実とのギャップに少し頭がくらりとするほどだ。

猫妖精ケット・シーは妖精種の中でもぶつちぎりで体力・筋力・耐久に欠けるが、他の要素はそこそこ優れている。特に敏捷・器用・幸運は最高クラスのポテンシャルを誇っていた。

しかし魔術師ならエルフやハイエルフが人気、盜賊シーフや探求者シーカーにすら身体面も優れた獣人種ブリストが向き、神官ガードィアンにするには少し魔力・知力が心許なく、守護者ウォリアーと戦士ファイターと格闘家ファイターは以ての外。

ようするに器用貧乏フールで、遊び人くらいにしか向いていない。その遊び人が少ないので、必然的に猫妖精の数も少ないのだ。

接近してみると、どうやら建造物はテントだつたらしい。円形のそれは、遊牧民族が使うものに似ているひとけが、あまりに人気が無い。テントは5つほど並んでいるが、全く人の声がしないのだ。

「襲撃でもされたかな……まあ、探してみよう」

物騒な事を言いつつ、テントの間を歩いてきょろきょろと探し回る。

リノは種族と職の特徴として、幸運がかなり高い。幸運値の高さは隠しスキルの超直感シックスセンスに反映され、ゲーム内では隠された物の発見を手助けしてくれた。具体的に言うと、怪しい場所の上に見えにくい三角が出る。リノはこの三角の発見率が物凄く高かつた。

ちなみにこれは誰でも稀に発生する現象だが、すぐ消えるので見間違いかと思う人が多い。

あたりを見回すと、盛られたような藁の上に半透明の見慣れた三角形が浮いていた。鋭角で下を指していたそれは、すぐに消えてなくなる。リノは上機嫌で、藁の塊を覗き込む。

「さわりたくない……」

納豆のような臭いがする。黒い靴下にハイカットのスニーカーを履いた足で、つんつんと藁を突付く。うーん、と少し悩んでからスキルを発動させた。

すると、藁の塊が浮かび上がって何かが地面にどすんと落ちる。
『念動力』。これも特殊技能の1つだ。

本来、ゲーム内で物を動かすには、所有権が自分にあるか誰にも無い物ならアイテムボックスに入れて出すだけで良い。念動力は本来物を動かすのではなく、モンスターを戦いややすい配置にしたりする事に使う。勿論物にも作動するが。

藁は完全に脇に退けられて、残ったのは啞然としている子供がひとり。

「なつ、な、ひつ……
「やあ」

ひいいと何故か脅えている少年は、体の骨格こそ人間に近いが、顔がまるつきり犬だ。

犬の特徴を持つ種族は3つあり、犬妖精（愛すべき不人気種）と獣人の狼人族（ちなみに獣人は狼・猫・兔の3種）、そしてNPC限定種族のコボルトだ。

コボルトは敵モンスターでもあるが、このゲームでは普通にNPCにもゴブリンやコボルト等が居る。ゲーム本来のNPCの他、捕獲したモンスターをペットにして露店を任せられる者が多い。リノもレベル950の死神道化師に露店を任せている。名前をイ

ットと言つたが、プレイヤーの中では「トラウマが蘇る」とか「分かつても一瞬びくつとする」とか「お前はステイブン・ングか」等と大人氣である。

「ゴボルトか。パパヒママはどうにいるんだい？」

「お、おおおお父さ、お、おとうさあああん

「な、何で泣くんだ！　もう、だから子供つてのはやなんだ」

リノは子供が苦手だ。思考がよく分からないし身勝手でよく泣く。前者2つについては思い切りリノにも当てはまるので、間違いなく同族嫌悪だろう。暫くリノはぐすぐすと泣く子供サイズの一足歩行犬を眺めて悩んでいたものの、手に持ったリュートを構えて弾き始めた。

沈静化（精神系状態異常の回復）の効果のある、《水精靈のブルース》。何故か頭に流れ込む詩を口ずさむと、子供はみるみるうちに泣き止んで目をぱちくりとさせる。

ワンフレーズを歌い終え、はあ、と嘆息した。

「落ち着いたかい

「う、うん」

至高の音色と謳われる（といつ設定）のレア楽器、《アル・ウード》。名前の由来はリュートの祖先と言われる楽器だ。形は琵琶に似ており、丸みのある背面には美しい模様が描かれ、弦の下の穴には凝った意匠の透かし模様。職人技を感じさせる逸品で、名前の由来はリュートの祖先にあたる楽器だ。

少年は落ち着くと共に見たことの無い美しい楽器に眼を見張り、次に上を見上げて目に入つたリノの顔に口をぽかんと開けた。

「お名前は」

「……れ、レータ

「レータ君か。とりあえず起立しよ！」

「きつづ？」

「……立つてみて」

立ち上がったレータは、ふんふんと鼻を鳴らしながら立ち上がる。よく見ると、本物の犬より少し鼻が低いようだ。ちなみに毛色は柴犬のような茶色である。

リノの身長は160cmジャスト。元の体での身長ではあるが、目線が変わらないので多分同じなのだろう。そのリノの胸あたりまでしか身長が無いため、おおよそ140cm程度だろうか。

「10歳くらいいか？」

「う、うん、10歳」

「そうか。で、10歳のレータ君を放つて君のパパとママは何処に？」

割と酷い物言いだが、気を害すでもなくレータはしょぼくれた顔になる。リノはまた泣くのか？ と若干後退した。逃げる気満々である。

「ど、奴隸狩りなんだ。こんなところまで悪い人がきて、みんな、連れてかれちゃった。だ、だれか助けてくれるまで、ここにいるって、お、おとうさんか」

「奴隸狩りい？」

あまり聞きなれない響きである。レイスタイルの世界に奴隸制度は存在しない。捕獲出来るのは最初から敵であるモンスターと、元からペットとして用意された者たちのみだ。

いや。遠い記憶を辿ると、そういうべきで聞いた事がある

氣もする。確か、

「……あ、あれか」

レベル800あたりの頃に受けたクエストだ。コボルトの家族が奴隸商人に攫われ、それを助けに行くという内容だった。

レイスタイルのプレイヤーは冒険者と呼ばれるが、NPCの冒險者も存在する。彼らは基本的には戦わず立っているだけだが、クエスト等の際に共闘する事もある。そんな冒険者NPCの中でも悪人設定の者達がいて、無法者イリーガルと呼ばれていた。彼らはせこせこと悪事を繰り返し、クエストにもよく敵役で登場する。敵モンスター扱いなので、戦闘中であれば捕獲してペットにも出来る。

ちなみにリノも無法者イリーガル出身のペットを持っている。名前はカンダタといい、自称大怪盗の紳士スタイルな美青年で、「ネーミングが酷い」としおつちゅう言っていた。ちなみに彼は盜賊シーフの最上位クラスである大悪党イートリアスである。

「うーん、助けた方がいいかな。どっちに攫われたか分かる?」

「……た、多分、あっち

「ふむ。あ、馬車が何かの走った跡があるね」

リノはぐるりと体を横に向けて、すたすたと歩き出す。助けるかは後で決めるにしても、無法者が向かつたなら街が何かがあるとう事だ。

その後ろを慌ててレータが着いてくる。

「お、おねえちゃん、危ないよ」

「僕は平気だ。助けてくるから、きみはテントの隅でガタガタ震えてるといよ。じゃ」

「ええ！？」

「最悪、全部眠らせて救出するし。じつするへ。」

スキルが使えるのであれば、全く問題無い。レベルが高いので殆どスキルは必中だし、眠らせたり氣絶させたりのスキルは豊富である。

レータは少し悩んだ後、リノの上着の裾を掴んで着いてくる。

「おや、来るのか」
「う、うん。し、心配だもん……」
「そうか。見上げた心意気だ」
「いや、おねえちゃんが……」
「……」

「こり」と笑顔が降つて来る。レータは震え上がったが、ますますリノの上着を握り締めた。

はじまりの遊び人（後書き）

のんびりいきます。

人助けする遊び人

リノは息を切らすレータを励ましつつ、平然と歩いていた。続く跡を辿りながら、かれこれ數十分は歩き続けている。

「お、おねえちゃん、何で疲れないの……」

「強いから」

身も蓋も無い。レイスタイルにスタミナのステータスは無かつたが、やはり体力値のおかげだろうか。初期値も上昇値も雀の涙とはいえ、1000レベルまでいけばそれなりの数値になる。リアルでは運動が得意でないリノだが、今のところ疲労感は感じない。

「疲れるかい？」

「うん」

「……うーん」

リノは逡巡した後、あ、と思いついたように声を上げて脳内にウインドウを思い浮かべた。

すると視界に、ゲームそのままのステータスウインドウが現れる。ゲームと同じように動かしてみると、問題なく操作できた。

「なんだ。簡単じゃないか

「……何が？」

「何でもない」

まるでVRだな、リノは小さく笑う。そしてアイテムボックスから田畠でのものを探し出して選択した。

「ちょっと離れてて」

手の中に現れたそれは、《召喚鍵》というアイテムである。通常の召喚技能はペットのLVやランクに応じてMP消費が必要だが、このアイテムがあればMP消費が必要なくなるという優れものだ。ちなみに召喚はレベル20で手に入り、捕獲と同時にクエストで習得できた。

楽器を一度仕舞い、美しい細工の施された鍵を空中に突き出して、ゲーム内でキャラクターがしていたように捻る。すると足元に魔法陣が現れて、咆哮と共にペットが出現した。

「ひぎやあああああ！」

背後のレータが絶叫した。リノは振り向いて、逃げ出そうとしたレータの襟元を掴む。

「こり、逃げるな、怖がらなくていい。僕のペットだ」

「ペットおおお！？」

「そうだよ。今時はモンスターは捕まえないのか

「つ、捕まえる！？ 何で！？」

ふむ、リノは口元に指を当てて考える。どうやらゲームそのものの世界ではないらしい。ペットスキル（捕獲と召喚）を得る

クエストの最後には、捕獲試験がある。試験で得たペットはそのまま自分のものになるので、ペットを持っていないプレイヤーなど殆ど居ない。

レータの脇腹に手を差し入れて、ひょいと持ち上げて 従順にお座りしていた巨大な体躯を持つ四足の獣、白虎の背中に乗せた。

「あるじ、随分久しいなあ。忘れられたかと思つたぞ」

のんびりとしたバリトンで言われ、一瞬驚いたもののリノは笑顔で誤魔化す。

確かにゲーム内でも喋つてはいたが、こんな口調だつただろうか。

「おや、……まさか。そんなに薄情者に見える?」

白虎は朱雀・玄武・青龍と合わせて捕獲した、それぞれLV900のボスクラスのモンスターだ。1匹1匹が恐ろしく強いので、倒すだけなら兎も角捕獲は非常に難しい。しかしリノは4匹とも手に入れて、それぞれハンシン、ヒバリ、ガメラ、ギャラドスという。由来は様々だが、いずれにしろ酷い事は変わりない。

「千年も何をしておるのかと思つたが、死んでおらんでよかつたわ」

「……千年?」

「うむ。どうした、寝こけておつたか」

「そんなどころだよ」

思わず事実に若干驚きつつも、動搖は仕舞い込んでハンシンの背中に跨る。白い毛は触り心地が良かつた。

今だ恐怖に固まっているレータを後ろから腕を回して支えると、「ひぎやあー」と再び叫び声。「こわくないこわくないと宥めるリノだが、レータが叫んだのは年上の美人に抱き締められた事による驚

愕と氣恥ずかしさだ。

「その馬車の跡っぽいのを辿つて走ってくれる？ 町が見えたら止まつてね」

「あい分かつた」

ハンシンは大地を蹴つて駆け出し、歩くのとは比べ物にならない速さで荒野を抜けていく。尤も俊敏値はリノの方が上なので、本気で走れば簡単に追い抜けると思われるが。

レータは暫く怖がつて叫んでいたものの、次第に叫び疲れたのかぐつたりと力を抜いた。

リノはスピード感と風を楽しみつつ、レータが落ちないように細腕で固定している。揺れないように走っているのか、快適だった。

「やはり人を乗せて走るのは楽しいことよ！」

機嫌よく言い、「ガルルルルアアー！」と雄叫びを上げる。腕の中のレータが「ひいいい！」と再び絶叫した。リノはくつくつと笑いつつ、思考を巡らせた。

何の役目も与えられていないペットは、亜空間に収容されているという。リノも膨大な数のペットを所有しており、その多くが様々な役目を与えられて動いている。目指すはモンスターのコンプリートだつたが、流石にそれはまだ成し遂げていなかつた。

千年という時間経過。執事や店員として働いていたペットたちは、一体どうなつたのだろうか。千年後のレイスタイルがどうなつているのか、まったく想像も付かなかつた。

「町が見えたぞ！」

「あ、うん」

ゆつたりと減速し、ぴたりと歩みを止める。リノはレータを抱き上げたまま地面に降りて、お疲れ、と声をあけてハンシンに戻るように言った。

レータは地面に降りると、へなへなとへたり込む。

「どう?」

「し、し、しゅ、しゅかと思つた……」

「そのくらいで死なないよ。ほら、立たないと置いてくよ」

「うえええ」

子供にも容赦なく叱咤して立たせ、膝の笑つているレータを半ば引き摺るように連れて行く。街はやや暗い雰囲気で、門番らしき者も見えない。

ここでも脅えるレータを、痺れを切らしたリノがおぶつて進んでいく。記憶にある町々を思い浮かべたが、ここまで活気の無い街は流石にゲーム内にも無かつた気がする。

「しかし人が少ないね。モンスターにでも襲われたのかね」

「……っひ、そ、それじゃあ」

「まだ分からないよ。慌てない慌てない」

葬式のような空氣の中、何かに脅えるように街を小走りに駆けていくごく少数の人々。

子供の遊ぶ姿すら無く、以前あつた突発的な小イベントを思い出す。無法者の集団が街に現れ、人々は脅えて家から出ず、ゴーストタウンのような有様になっていた。勿論その後で嬉々として討伐に行つたが。

おそらくそのパターンかな、と予想してアイテムボックスから楽器を取り出す。

「あれかね」

いかにも無法者^{イリーガル}の集まりそうな酒場がある。そこに荒々しい雰囲気の男が入っていくのを見て、リノはとりあえず近づいて覗き見た。レータはガタガタ震えて必死に首にしがみ付いている。

「だな！ 全くザコばっかでよお」

「酒もつてこい！ もつとだよ、もつと」

「おい、姉ちゃんいいケツしてんな、こっち来いよ」

いかにもな連中が赤い顔で酒盛りに興じ、給仕の女性に絡んだりしている。リノはこつそりと特殊技能^{エクストラスキル}の『分析^{アナライズ}』を発動させてステータスを見たが、全員無法者^{イリーガル}、ジョブは盗賊^{シーフ}と戦士^{ウォリアー}と探求者^{シーカー}がそれ数人ずつで、レベルは20から30程度。全員クラスすら無いようで、ゲーム中で言えば初心者レベル。

最初のクラスが手に入るのは全職共通でレベル5である。入手クエストも「クラス認定書を　さんから受け取つて来てくれ」程度のもので、それこそ猿でも出来るようなものだ。

(もしかしてクエスト自体が無くなつてるとか?)

まあ、それは後で考える事だ。相手は弱いに越した事は無い。

とりあえずレータを降ろし、ちょっと待つて、と声を掛けて店内に入つていく。小声ながら必死に「あぶないよおおお」と言つしレータはスルーした。

「あのつ、少し聞いてもよろしいですか

控えめに言う、見た目だけはか弱そうな美少女。ミニスカートと靴下の間に見える白い太腿を見て、男達は下卑た笑いを見せた。

「なんだ、こんな上物が残つてやがったのか」

「おい、来いよ。可愛がつてやる」

イラつときたが抑えて、脅えた表情を作る。とりあえず攫つた人々の場所を聞かなければどうしようもない。

「いえ、あの……わたし、コボルトのお友達が行方不明になつてしまつて。何か知りませんか？」

「コボルトお？ そんなもん、地下にいくらでも転がってるよ」

そう言つてげらげらと笑う。犯罪行為を隠す氣もない物言いに、呆れつつも安心する。少なくとも、人質に取られる者がこの場に無いのは僥倖だ。

「それはよかつた」

笑顔の質ががらりと変わる。怪訝そうにした男達を前に、リノは既にリコードの弦を指で弾いている。演奏スキルの中でも短い“和音”タイプのスキルで、男達はがくんと頭を落として眠りに落ちていく。《夢魔の和音》を幾度か繰り返すと、啞然とした給仕以外の全員が床に崩れ落ち、鼾が響いていた。

音に驚いてレータが顔を覗かせると、リノは振り向いて手招きする。

「縛り上げるから手伝ってね」

「……え、ええええつ！？」

そして困惑するレータと給仕に手伝わせ、アイテムボックスから大量のロープ（何かのモンスターが落とした、用途のないゴミアイ

テムである）を取り出し、男達を1人ずつ手足を縛つて行つた。

「ふざけんじやねえぞクソアマあ！」

「はいはい僕はクソアマですアバズレビッチですー、地下室みつけ

皿を覚ました男達は、隠されている筈の扉をあつさり発見したりノに驚愕する。リノにとつては隠すのうちにも入らない程度の隠蔽だ。上に棚が置いてある程度、全くもつて障害になり得ない。やはり筋力も適用されているらしく、平然と棚を持ち上げてどかし、扉を開いて下に降りる。ちなみにこの棚を動かすのに、大の男が2人必要だった。

「やあどうも、こんにちは」

石の地下室に、大量に押し込まれた人々が居た。コボルトだけではなく他の種族も沢山居る。どうやら町の人々も混ざっているらしかった。

彼らは恐怖に脅えた顔をし、次いで怪訝そうにして、最後に降りてきたレータを見て数人が驚愕した。

「レータっ！－！？」

「おとおさああああああああん！－！」

さつと避けたりノの横を駆け抜けるレータ。服から飛び出た尻尾が引き千切そうな程振られ、耳がへにゅりと下がっている。コボルトの男性は信じられない、という顔でレータを受け止めて抱き締める。わんわんと泣きじゃくるレータに、コボルトの女性が飛びつく。

「レータつ……！」

「おかあさあああああんつ」

感動の再会といった様子にリノは両手を広げて肩を竦め、「まったく困ったもんだぜ」とでも言いたげな顔をしている。そんな彼女に一人のゴボルトの老人（？）がゆつたり歩み寄った。

「お嬢さんは、上の連中のお仲間ではないようじゃが」

「そうだよ。ワルに見える？」

「いやいや。まるで天使に見えるのう」

思わずカウンター攻撃に、つい真顔になつた。ほつほつほと笑うゴボルトの老人は、油断の無い表情で問う。

「じて、奴らは？」

「一応繩で縛つてあるけど。とりあえず何人か人を寄越してほしいかな」

「うむ、勿論じゃ。……何処のどなたか知らぬが、どうもありがとう」

両手を合わせ、深く頭を下げる。リノは「な、成り行きだしあれとかいらないし」と照れ笑いを浮かべた。

ひとまず無法者^{イリーガル}は再び眠らせ、男衆が留置所に運んで行った。リノは助けたもののどうしようか、と逃げるタイミングを窺っていた。どうやらコボルト達は旅をしながら商売をしている集団らしい。しかし今回はこの街に賊が蔓延っている事を風の噂で聞き、離れた場所でテントを張つて立ち往生している所を襲われたそうだ。

「しかしあれ、でつかいテントだね。建てるのにどれくらいかかるの？」

「皆でやればそんなに掛かりませんよ。5、6時間程度ですかね」

長の息子だという青年、ウハルとのんびりとお茶をしながら待つ。かれこれ數十分も経つていたが、なんだかんだで会話を引き伸ばす手腕は確かに商人に向いた感じで、リノも若干感心していた。感心はするがそろそろ逃げたい。

「おや、どうやら街の方々に話が伝わったようですね」

「へえー。僕はそろそろお暇、「この後食事を用意しておりますの

では是非とも」一緒にいただけですか?」……「うん」

畳み掛けるように言い、につこりと犬顔が笑う。どうやらコボルトにも人種のようなものがあるらしく、ウハルはなんとなくサモエドに似ていた。白い毛に笑い顔がまさにサモエドスマイル。本当に商人向きだな、トリノは力なく頭を垂れた。

数十分後、リノは半泣きで会場内を逃げ惑っていた。ここですよ、と連れてこられた宿の一階の食事所には、予想よりかなり多い人々が揃っていた。子供達には好奇心バリバリで追い回され、大人たちには涙ながらにお礼を言われ、子供が苦手で賞賛と感謝を向けられるのも苦手なリノは食事もそこそこに逃げ回っているのである。

「待て——つ——！」

「虎出せり！ とらーーつ！」

「出でないからつ！ 来るな——つ！ 寝かすぞ！」

最初は半信半疑だつたらしいが、謎の技術を使うリノを見ると疑いも無くなつたようだ。リノは特殊技能まで使って逃げ周り、ついには街の方に飛び出　そうとして誰かにぶつかつた。

「うわっふ！」

-
h
?
L

逞しい体躯の男である。見上げれば顔は銀色の狼頭で、しかし袖から出た手は人間なので狼人族だろう。^{ワーウルフ} 獠猛な顔は怪訝そうにリノを見下ろしている。

しかしリノにはどうでもいい事だつた。「もうっ！」と叫ぶなり何故か狼男の両足の間をすり抜け外に駆け出し、それを子供達が

追い、後ろであまりのダイナミックな逃走法に人々が大笑いし始めた。

両足を門扱いされた男は怪訝そうな顔で後ろを振り向きつつ、入り口付近に居た知人に問う。

「何だ今の？」

「やー、ヴィックル。遅かったな、あの嬢ちゃんが皆捕まっちゃったよ」

「……はあ？」

ヴィックルは昔この街で暮らしていっていた者で、今は王都で騎士をしている。風の噂でこの街の危機を知り、休暇をもぎ取つて駆けつけてきた。しかし戻つて来たものの街は平常どおりで、人々は何か宿に集まつて宴会中だという。

そして宿に来たら今のは展開だ。

全く訳が分からぬ。

「……どなたか引き取つてくれるかな、ガキどもを」

なんとなく宴会に加わつてヴィックルが酒を飲みつつ話を聞いていると、入り口に子供を引つ付けたりノが戻つてきた。3人の子供は揃つて熟睡しており、1人は首に巻きついて眠り、残りは小脇に抱えられている。

何とも微笑ましげな視線が集中して「あああかゆい！　かゆいからその目！」と再び悶絶し始める。ヴィックルは別の点を抜け目なく観察していた。あれだけ走り、子供を抱えて戻つても全く息切れや疲労が見えない。

「おや、さつきの狼人族。^{ワーウルフ}ぶつかつて申し訳ないね」

「いや、構わん。それより少し話を聞かせてほしいんだが」

「いいよ。冒険者の人なら、僕も得るものがありそうだ」

カーンとバトル開始のゴングが鳴ったような気がする。にんまりとリノは微笑み、情報を榨り取るだけ榨り取ろう、そして逃げようと思悟を決める。ヴィックルもまた、リノを見極めようとに獰猛な笑みを浮かべた。

「賊どもを眠らせたと聞いたんだが、『睡魔^{スリープ}』の魔法か？」

「いや、僕のはちょっと特殊でね。このあたりじゃ無いのかな、楽器の技は」

「噂で聞いた事はあるがな。見せてもらえるか」「構わないよ。じゃあ、一曲」

アイテムボックスからリュートを取り出す。それだけで回りが驚くが、特に意に介さずに足を組み、ついでに演奏補助スキルを発動する。これは音を重ねて効果を上げるという物で、テーブルの上にアコーディオンとフルートを持つた掌大の小人が現れ、更にざわめきが増した。

曲目は、『琵琶法師の応援歌』である。名前からしてふざけているものの、その効果は絶大だ。

全て演奏すると5分もかかるそのスキルの効果は、HPMP持続回復（5秒ごとに10%）とステータス全上昇、取得経験値10%UPにアイテムドロップ率50%UP、極めつけに敵へのステータス低下とランダム状態異常付^{ボックル}。

補助スキルの最高峰とも言えるその曲は、冠する名の通りなんとなく古臭い。しかし不思議と心の躍るような感覚に、ヴィックルは目を細めて聞き入る。

ざわめきは消え、ただ皆が息を呑む。なんとなく活力が溢れ、何でもできるような気分になつていくうちに曲が最後の一音を奏で、

リノの「おしまーい。じゃ、そういう事で」という言葉に我に返る。そのまま逃走を開始しようとしたので、ヴィックルは腕を掴んで引きとめた。

「何だい？」

「話を聞かせてくれると言つただろう」

「ここの様子で？」

にやりと笑うと共に、周りから万雷の拍手が降り注いだ。これが狙いか、とヴィックルも口元を歪める。

「なら明日聞かせろ」

「ふーん」

にやりと笑うリノだが、いつまでも腕を掴んで笑い合つ（ただし笑いの種類がダークサイド）2人を見て、いい雰囲気だと散々からかわれて、キレて全員眠らせたのは余談である。

そのまま宿にタダで泊めてもらつた後、食堂の端にバリケードを作成して、ヴィックルを待ち構えた。その顔は何故か疲弊している。昨日は吟遊詩人ミンストレルのクラスだったのだが、昨夜の内にクラスチェンジをした。結果、ゲーム内と同じエフェクトが出て「人前でやらなくて良かつた……」と心底思つた。

至高人限定のエフェクトは大量にあるが、クラスチェンジ時のも

ハイランダ

のはこういったものである。

体が発光し、足元に魔法陣が現れてぐるぐると回転し、軽く体が浮遊する。更に光球のついた神々しい輪が体の周りを回転する。置物のモビールみたいな回り方で。

更にトランプが魔法陣の四方のストートから飛び出してそれぞれリノの胸に吸い込まれていき、最後のジョーカーが一際輝いて胸に吸い込まれると共に体が派手に発光する。

そしてふわりと地面に降り立つたリノは、最上位クラスの遊戯人ジョーカー用に設定しておいた装備に切り替わり、手に大鎌（ネタ武器）を持つて見事に〇一二の体制を取った。

その後床に拳を叩き付けながら叫んだ言葉を、もう一度繰り返して言う。

「……魔法少女かつ！」

「は？」

四方を巨大トランプの壁で覆った部屋の一面を開き、ヴィックルが現れる。リノはぶつぶつと咳きながら朝食のパンを噛み千切った。午前10時。色々と涙目だつたりノは思い切り眠りこけて、こんな時間にやつと朝食を取っている。……本当は8時に起きたのだが子供の襲撃を受けて2時間も口スした。

どうやらレータに話を聞いたらしく、やたらハンシンを見たがるのである。これは後で締めなければな、とリノは心に決めた。

「で、何だい？ 話？」

「ああ。 昨日の演奏だ。 あれは原初魔法か？」

「オリジン？ ごめん、僕かなり世間知らずなんだ。多分千年前で頭が止まってるから、専門用語は説明を添えて使って」

ひらりと手を振つて照れ隠しにオムレツにスプーンを突き刺す。ヴィックルは向かい側の椅子に座ると、既に用意されていた紅茶に口を付けた。

「……千年前？」

「何だか分からぬけど、超長い昼寝でもしていたみたいで」

突拍子もない話に、ヴィックルは眉を顰める。リノは既に彼のステータスを分析^{アナライズ}で見ており、こいつならバラしていいや、と思っていた。

「つてか、君も千年前の人じゃないか」

「……。何でだ？」

「分析^{アナライズ}。しつかしまあ、ペットが一人歩きか」

時代の流れ^{ワールフ}ってすごいね、と笑う。ヴィックルのステータスには、狼人族^{ワルフ}の剣騎士^{バスター}、レベル682。そして一般市民でも冒険者でも無法者^{イリーガル}でもなく、ペットと書かれていた。狼男^{ウルフマン}ではなく狼人間^{ワルフ}と書かれているため、元無法者^{イリーガル}だろうと予想が付いたが、そこは突っ込まずにおぐ。

「何のことだ」

「しらばっくれないでよ。しかも師匠のペットだし」

「師匠？」

「イロハ・ニホヘト師匠」

至高人^{ハイランダー}の1人、イロハ・ニホヘト。魔術師^{マジシャン}のソロプレイヤー

で、彼こそが1人目に至高人^{ハイランダー}になつた男である。

装備をぎつちりと体力・耐久で固めた竜人族^{ドラゴノイド}にして、前衛特攻型

魔術師の彼は敬意と畏怖を込めて「師匠」と呼ばれていた。

ヴィックルはその名前を聞くと、驚愕したように田を見開く。毛を逆立てて牙を剥き、怒鳴るよつこ言つた。

「イロハ様を知つてゐるのかつ！！」

「既知だけど。居場所は知らないよ」

食い下がるヴィックルを宥め、ひとまず千年前や今までに起つた事を説明させた。

かつての時代は、今では古レイスタイル文明と呼ばれているらしい。当時のアイテムの多くは古代遺物アイティファクトとして高値で取引され、また研究の対象にもなつていて。

当時の冒険者達は千年前に姿を消し、ペット達には契約と忠誠が残つた。無論そのうち老衰で死ぬペットも出たが、今までどおり亞空間に戻るだけだつたらしい。

ヴィックルは千年前イロハと一緒に居たのだが、唐突に主の姿が搔き消えて跡形も無くなり、そのままイロハの拠点ホームで数百年暮らしたそうだ。

その拠点がこの街付近にある、と聞いてリノが目を見開いた。

「……つて事はここ、アーティアレスト！？ あれ、王都は？」

「冒険者が消えた後、モンスターを押さえきれなくなつて王都は移転した。イロハ様の拠点は守つたが、当時の王都は一度更地になつた」

「いや、国も守つてよ！」

「反省はしている。レイクルに叱られて、仕方なく騎士団に入ったんだが

「レイクルつて？」

「無法者時代に仲間だつた猫人族だ」
　　^{イリーガル}
　　^{ワーキャット}

アーティアレスト王国はスターート地点の神殿もある大国、だつた。どうやら今は三つに分裂し、神殿のある東側がアーティアレスト王国、内陸の南側がアーティア共和国、北側にティア・ニール帝国、となつてゐるらしい。外側の国を取り込んでるので結構大きい国になつてゐるそうだ。

「あと、クラスとかどうなつてるの？」

「習得は実質出来なくなつた。偶然に条件をクリアして習得する者も稀に居るようだが、気づかないらしい。……あとは、クラスを持つて生まれてくる子供が500年くらい前から生まれ始めたな」

「それはまた、……何か、びっくりなんだけど

「ああ。正直、聞いた瞬間から数時間は口が閉まらなくなつた」

「……え、まさか先天的大魔術士とか居ちゃうの？」

ヴィックルが無言で顔を横に逸らす。リノは「ぐりと睡を飲み込み、思い切りフォークをトマトに突き刺した。　そして重々しい声が述べる。

「いる」

「こうす」

「……イロハ様のクエストは見たし、俺も理不尽すぎるとは思ったんだが」

リノは遊戯人習得クエストを思い出すと、頭痛がする。
　　^{ジョーカー}

まず一段階目からしてぶつ飛んでいる。内容ではなく、数が。

殺人鬼をソロで100000匹狩れ。100か1000の間違いではないかと画面を睨んだリノは正常だ。しかも殺人鬼は格下ながら攻撃力が高く、紙防御のリノにはキツいものがある。一撃で5~1

0%もHPが削れるのだ。

ミンストレル

クラシック

それでもなんとか吟遊詩人や聖職者にパーティを組まなくていいタイプの支援スキルを掛けてもらい、ひたすら頑張った。一応これはまだ、時間さえ掛ければクリアできるので良心的な方だ。しかし今でも殺人鬼の笑い声がトラウマ気味である。

勿論それだけでは終わらない。

次は道化王^{クラウンキング}をソロで100回討伐。道化王^{クラウンキング}はダンジョンボスで、レベルは850。正直ギリギリだ。しかも1回ごとにダンジョンに潜らなければならぬし、入場制限のせいで最初から最後までソロでなければいけない。本気でクラス伝授者を殺したくなつた。

その後はレアアイテムを100個やらNPC50人に話をしてこいやら無法者^{イリーガル}を50人討伐しらと地味に胃と頭と精神に来るクエストを繰り返し。

ようやく手に入れた最上位クラスなのである。

他のジョブも似たりよつたりで、格闘王^{グラップラー}なら“PvP（対人戦）”で100戦勝ち抜け”やら守護神^{バリアント}の“戦闘中に30回以上HPを5%まで減らして生還しろ”やら探検王^{スペランカー}の“各地に100箇所隠した地点を探せ”、とそんな感じである。

「腹立つー。あ、という事は僕のホーム残つてるのはかな？」

「至高人級^{ハイランダ}の拠点^{ホーム}になるとほとんど古代遺産扱いだな」

「それは製作者冥利に尽きるね。ダンジョンは？ うちのギルドわんさか作つてたけど

「……各地に残つているが……ん？ お前、まさか」

「あ、そういう自己紹介がまだだつたね。【アルテマ】の8番め、リノだよ」

ぐあ、と大きな口が開き、ヴィックルは啞然とした。

ゲーム内でも変装してバラしたりするとの反応だつたな、とり

ノは古事記かしづくつた。

狼人間と遊び人 つづき

【アルテマ】は生きた伝説扱いのギルドだつた。
N〇1の忍からN〇8のリノまで、全員が至高人^{ハイランダ}。しかも全員違うジョブで揃えている。人呼んで“至高のギルド”……ようするに廃人だけなのだが、物は言い様だ。

初心者向けから玄人向けまで数多くのダンジョンを（夜中のテンションで）作成し、有力ギルドに攻め込んでは何も獲らずに帰ったり、かと思えば1人ずつイロハ・ニホヘトに闇討ちされて復讐を誓つていたり、何故か王都でライブをしたり、高価な装備やアイテムを1テール（貨幣の単位）で大量に流して相場をガタ落ちさせ、以下略。

良い意味でも悪い意味でも有名なギルドである。

「…………リノって…………あのリノか…………？」

「どのリノか知らないけど。僕しかいないだろうね、リノは」

同じ名前は登録できないので、リノのようなありがちな名前は大抵が古参である。

「モンスター襲撃のイベントで、毎回何もせずに踊つてたりする……」

「そのリノだよ」

リノは自分がやらなくていい時は大抵踊るか遊んでいた。踊りは一応効果のある吟遊詩人（ミンストレル）のスキルだが、楽器の方が遙かに効率的である。ちなみに種類はベリーダンスに剣舞、社交ダンス（男女の2種類があり、ペアでする）など。

トリップする前も街中にギルドで集まり、知り合いの遊び人をありつけ集めて演奏やダンス、更にその周りでひたすらギルメンが花火やらを打ち上げたりと騒いでいた。名目上はギルドメンバーの誕生会である。

「で、クラス持ちとかの事を説明よろしくね」

「ああ。……クラス持ちは結構数が多い。やはり下位のクラスが多く、最上位なんかは片手の指で足りる程度だ」

「へー……」

「ある程度、遺伝もするらしい」

滅茶苦茶な話だ、とヴィックルは力なく笑った。彼自身、ゲーム内で描かれてはいないとはいえたクラスを得るために必死に努力したのだから。

「そういえば、ステータスとか分かる？」

「ステータスは……まあ、俺たちには見えている。他は見えないらしい」

「アイテムボックスは使える？」

「アイテムボックス……ああ、あれは無理だ」

「ふーん。スキルってどうなってるの？」

「クラス持ちはある程度使える。だが、合わない武器を使っていて習得できない事が多いな」

本来自分の装備可能な武器というのは決まっていて、それ以外装

備は出来ない。装備している武器のスキルが習得／強化されるというシステムなので、その所為でスキルが覚えられないのだろう。

「指摘しないの？」

「したが……素手で攻撃とか馬鹿か、とか。針なんて何に使えるんだ、とか……言われてな」

素手やナックルは格闘家の武器、針は盗賊の武器のひとつである。

「遊び人は？」

「発見しにくい。トランプで机切り倒して奴がカジノに居たから、多分あれだと思うが」

シユールな光景だが、トランプは遊び人の代表的な武器で、道化師、奇術師、賭博師等のクラスで使用できる。

「つて言つが、クラスつてどうやって見分けるの？ ステータスが見えないんでしょ」

「……今では古代遺物扱いだが、プロフィールリングというのがあつただろう？」

「…………え、あれ？」

レイスタイルでは、基本的には他人のステータスが見られない。デフォルトで情報開示がオフになつていて、勿論開示をオンにしておけば見られる。分析は特別だ。

部分的に見せたい場合はプロフィールリングというものを使う。レベル、ジョブ、クラスのみが頭上に表示されるようになるアイテムだ。ちなみに普段は名前・ギルド名のみが表示されている。

「何か色々と微妙な……ジョブとかレベルも？」

「ああ。子供が生まれると、必ず調べる事になつていの」

「うわー。今いくらくらいする?」

「昔で言つと1億テールくらいはする。大きな都市のギルドや神殿

になら置いてある

「……僕、造れるんだけど。生産スキルも無いのか」

レイスタイルの生産スキルは一人で全種類習得できる。プロフェッショナルリングは細工のレベルで、生産スキルを習得すればすぐに作成する事が出来る。

生産の種類は加工・細工・裁縫・大工・鍊金・武器・防具・料理の8つあり、それぞれレベルは10まである。

「生産スキルは一応残つてはいるが、レシピが見られんからな
「なるほど。……でも、あれって確かテール消費じゃん
「その発想がまず無いんだ」

テール消費、とは加工や細工などの低レベル生産品によくある、材料無しで金だけ消費して作れるアイテムの事だ。
基本的に、あまり効果の無いものばかりである。

「えー……」

「そもそも金貨を曲げたり溶かしたりするのは違法だし、高価すぎ

る

「あ、そうなの。お金つてどうなつてんの?」

「あの頃は金貨一枚で1テールだが、今は100万テールの価値がある。銀貨、晶貨、銅貨、小銅貨が増えたな。それぞれ10万、1万、千、百の価値だ」

リノは思わず食後の紅茶を噴出しそうになった。

拠点にある分を含めると、リノの総資産は八十億テール弱。それ

ホーム

が更に100万倍という事になると、リノはこめかみを押さえ、頭痛を堪えた。

「僕、手元に4G^{ギガ}……40億、拠点にも同じ位残ってるんだけど。ああ、計算が！」

「ちなみにテールという単位は残っているが、あまり使われない」「うー……銅貨が1k、晶貨が10k、銀貨が100kか……金貨は1M^{メガ}ね。よし、覚えた」

「懐かしいな。イロハ様もよく使っていた考え方だ」

「覚えなきゃ生きていけないし……」

kやM、Gはオンラインゲームでよく使われる単位で、1k=千、1M=百万、G=10億である。流石にあまり使わないが、T^{テラ}=1兆なんでもある。

「あ、そういうえば商店とか商会は残ってる？」

「任せられてたペツト達が続けていたが、幾つかは潰れたな。サンカワ商会とホルム薬品店、トイストア・リトルクラウンは……お前の店か。残ってるぞ」

「残ってるんだ！ うわー、千年もよべやるね」

ゲーム内では露店を開けるが、土地を購入して店を作ったり、その分店を作ったり、または別々の店同士を商会として纏めたり出来た。リノは遊び人向け装備やネタアイテムのみを売る店、トイストア・リトルクラウンを経営している。正直最近は忘れ去っていたが、ちなみにそれ以外の品は露店などで販売している。

「そういえば、老衰で死んでも待機場所に戻ったんだよね？」

「ああ」

「待機場所ってどうなってんの？ 真空間って聞いたけど

「拠点のドアと繋がつていて、中は普通に自然が広がつていてる。他の

主を持つペツトも同じ空間に居るが、出られるのは自分の主の拠点

点とギルドの拠点からだけだ」

「ふーん……あれ、召喚しなくても出られるの?」

「《召喚鍵》でドアを開ければいつでも出られるよつになつた」

再びリノが紅茶を噴きそうになつた。

そもそも《召喚鍵》は入手方法がボスモンスターからのドロップしかない。取引不可アイテムなので、人に譲り渡す事も出来ない。つまり彼らが自力で取つてきたという事になる。

「……《混沌召喚師》なんてよく倒したね」

「うちの連中は精銳揃いだからな」

《混沌召喚師》は、召喚スキルで大量にモンスターを呼び寄せてくるえげつないボスモンスターである。本体もレベルは900と中々高レベルだ。

「多分、お前の所の奴らもやつてるんじゃないか」

「うちの子たちは、まあ、ね。つて言つた《混沌召喚師》も居るし」

「……! ?」

「敵性召喚すれば自給自足で稼げるね」

敵性召喚とはペツトを敵モンスターとして召喚するスキルである。こちらは召喚スキルよりもずっと後、レベル500で手に入る。また、固体名の付いたペツトではなく、普通のモンスターとして召喚される。しかし危険なので街中やフィールドでも使用は推奨されない。と言つた自分で処理できないと白い目で見られる。

経験値稼ぎにはなるが、同種は1匹ずつしか召喚できないので効率は悪い。普通に狩つた方が良い。

ちなみに混沌召喚師が使うのは普通の召喚だ。

「確かにライドウ君（混沌召喚師）は拠点で番人してたかな？ ペット仲間にボコられてるんじゃない？」

「仲間割れ！？」

「性格悪いしね」

モンスターとはいって、台詞は豊富に用意されている。混沌召喚師は「滅べ」が口癖の毒舌悪魔だ。ペットになつてからの台詞は「ふん、その程度で我が主君に逆おうとは愚かな。滅べ」やら「我が主の館へようこそ。不本意ながら滅ぶべき貴様のような豚にももてなしをくれてやる」やらとものすつごく傲岸不遜だ。

ちなみにレイスタイルの会話はフルボイスだ。合成音声システムで入力した文字を読み上げてくれるるのである。会話ウィンドウにも表示されるが。

「……うーん。とりあえず、拠点見ていきたいな」

リノの拠点はお遊び要素をたっぷり入れた森の中の洋館だ。

数々のギミックが施され、敵モンスターこそ配置していないがそこかしこにワープパネルやら悪戯系スキルのパネルがある。そしてリノの私室にたどり着けばちょっとしたご褒美が用意されていた。管理人はカンダタ、使用人頭は同じく無法者出身のパンドラ、更に大量の使用人を配置してある。彼らにはヒントを言うように設定してあつた。

「リノの拠点は何処だ？」

「レイリストの郊外の森。でかい洋館だけど」

「…………ああっ！？」

ヴィックルが驚愕の表情を浮かべる。驚いたリノは思わずデザートを取り落とし、恨みがましくヴィックルを睨んだ。

「お前の屋敷があれはっ！」

「ん？」

「昔、情報収集のために冒険者の拠点ホームを訪ねていたんだが

曰く、庭で遭難し、辿り付いた屋敷では慇懃無礼すぎると出迎えに散々嫌味を言われ、陰湿なトラップに足を取られて転び、転んだ後に更にトラップがあつて顔にマークが付き、更にそれを数十回繰り返し、ワープパネルの所為で迷いまくり、結局最後は外にワープして諦めた。

リノは聞けば聞くほどいい笑顔になつていて

「いやあ、ありがとう。ああほんと、最高」

「お前は最低だつ！」

ヴィックルに罵られつつ、リノは“迷いの館”と呼ばれているらしい我が家に行く事に決めた。

その後もぎやあぎやあ喚くヴィックルを宥めて色々と話を聞いたところ、原初魔法^{オリジン}とは現代の人間が再現出来なくなつてているスキルの事を言つらしい。原初魔法^{オリジン}は数百年の内に確認された物を指すが、古書物等の記録にしかないものは遺失魔法^{ロスト}と言われる。

また、クラス持ちは“ギフト”と呼ばれ、判明すると国立の寄宿学校に無料で通えるらしい。期間は基本8年間の飛び級有り、卒業後は軍、騎士団、神殿、魔術研究施設などに進んだり、あるいは冒険者になつたりする。

しかしクラスやジョブについての知識は殆ど忘れ去られ、そのせいで武器が特殊なクラスは殆どスキルが育たず、数少ない遊び人系は何もできず肩身が狭いらしい。

「腹立つから、そのうち行つて僕がスキルを伝授してやるつと思つ
「悪戯スキルばかり教えるなよ」
「やだなあそんな事……ところで進歩しない文明だよね。魔法発展
の弊害か」

「話を逸らしたな」

レイスタイルでは、魔法は誰でも使える魔力活用法、魔術は魔術師ヤンだけが研究してきた高度な魔法、とされていた。ちなみに神官のものは神聖術といふ。

MPをあまり消費しない生活系の魔法は共通技能に含まれ、暖炉の火種にできる《フЛАВА》、コップに水を満たす《БРОЙК》、暑い日に便利な《ФАН》、小さな植木鉢に土を満たす《ПОЧД》、懐中電灯代わりの《ЛАЙТ》等がある。

そして千年後の今は魔法も改良が重ねられ、攻撃力を増したもののが使われるようになつたらしい。スキルが使えないため、持て余したMPを魔法に回すようになつたようだ。

話を終えると丁度昼時になつていたので、荷物を取りに戻つて帰つてきたウハルを交えて食事を取る。朝食を終えて一時間半しか経つていないので、軽めのものを頼んだ。

「リノさんはこれからどうなさるんです?」
「どうつて?」

「此処に滞在するか、それとも王都の方へ向かうんですけど?」

「あー。王都の先に行きたい場所があるんだけど、王都にも寄るよ

レイリストは現王都の北西にあり、その更に先のティア・ニール帝国との国境を跨ぐ巨大な森にリノの拠点ホームはある。現在の様子は知らないが、とりあえず森は残つているらしい。

「1人で行けるか?」

「昔のアティナあたりでしょ? 行けるだろ? けど。でも一人旅はきついかな」

「じゃあ、俺も明日帰るから一緒にいくか」

「ああ、王都から来たんだつけ。ならよろしく頼むよ」

若干堅いパンを引き千切りながら言つ。

男との2人旅に全く抵抗が無い点に少し心配になりつつ、ウハルは旅の間の食糧を如何に売りつけようかと考えを巡らせるのであった。

翌朝、リノは一応長旅に耐えそうな手足の隠れる装備を着て下に降りた。

いかにもゲーム味の強い白いジャケットには青いラインが入っていて、なんとなく清純そつた雰囲気がする。下は膝丈のハーフパンツに黒タイツだった。

……装備に長ズボンが一つも無い事には、リノも初めて気づいた。

「おはよ

「おう」

ヴィックルは荷物を横に置いて既に朝食を取つている。夜までに荒野を抜けた先の村に着きたいから、と決めたのですぐに出立する予定だ。

暫く歩くためがつづりと朝食を食べているヴィックルの前に座り、既に用意されていた朝食を食べ始める。

「それにしても僕、慣れが早いよね」

「……？ そうか」

「適応能力ありすぎ。あ、聞き流していいよ、僕独り言多いから」

しかし堅いパンだな、とぶつぶつ言いつつ食事を進める。ビッグや
らあまり発展していない時代のようで、内装も外装も古めかしい。
しかしその割にあまり不潔さは無く、今一よく分からぬ。ゲーム
内とそう変わらない感じはするが。

「じゃあ、行こうか」

「おう」

食べ終えて、ヴィックルが食事代を払う。リノは金貨しか持つて
いないので、ついでにヴィックルに余分に払つてもらつた。タダで
良いとは言われたものの、少し心苦しい。

時間は朝6時。季節は春、少し肌寒い空氣だが顔以外は装備のお
陰か適温だ。

「げつ」

入り口とは反対側、街の出口に子供が数人立っていた。心底わく
わくした顔である。

というのも昨日、虎を見せる見せるといふので「なら僕が出
るより早く起きて見送りに来れたら見せてやる」と売り言葉に買ひ
言葉でつい言つてしまつたのだ。

リノは溜息を吐き、アイテムボックスから鍵を取り出した。

「来たね、ガキども」

「来てやつたぞ！」

「みせろーつー！」

「見せるまで通さん！」

眠気を感じさせないハイテンションで、読みが甘かつた、と諦める。

子供は苦手だ。それはもうかなり苦手だが、嫌いという程でもない。リノはハンシンを召喚して見せてやり、恐れるでもなくはしあぐ子供を見て少し笑つた。

レベル差が激しいのでうつかり殺害してしまつ可能性があり、若干ひやひやしたが。

「ではいすれまた会いましょう
「ば、ばいばい」

いつの間にかやつて来たウハルが相変わらずの笑顔で言い、レータがあどあどしながら手を振つてゐる。その後ろからも聞きつけたらしい人々が出てきて、当初の予定が丸ごと崩れた。正直な所リノもヴィックルも、見送りとか恥ずかしいからいらん、が共通意見だ。

結局レータに飛びつかれウハルには生温かい目で見られた。その後ちやつかり「是非とも次回もご覗願に。本家の店が王都にありますのでね、あ、レンダール雑貨店といいましてそこそこ大きいんですよ。父の兄が経営しておりますね、ええ、どうぞよろしくお願ひします」ビジネススマイルで言われて逃げるよつに飛び出したのは余談である。

あのままだと言葉に流されて投資とかする羽目になつたと思つ、トリノは後に語つた。

旅とは言つても、特筆すべき事は無く歩いているだけだ。街から見て西側には森、南北と東には荒野が広がっている。

早々に荷物も全てアイテムボックスに入れて、お互い手ぶらですたすたと歩いている。歩幅は違うが速度にはあまり差が無い。

「まあ、暫くは森に沿つてひたすら歩くだけだ。疲れたら言え」

「うん。モンスター避けとかした方がいい？」

「いらん。このあたりは精々、レベルで言えば50くらいまでの奴しか居ないからな。MPの無駄だ」

「ま、そっか」

ちなみに今の時代、一般市民はゲーム上の非戦闘NPCと同じくらいで1から20レベル程度の力量らしい。戦う職業の者は長年戦い抜いてやっと100レベルに到達し、一部の素質ある者やクラス持ちなどはやっと200に届く。

ペット達は遙かに上だが、基本的には時代に合わせて力を抑えて戦っていたらしい。

「……モンスターってどうやつて対処してるの？」

「基本的には集団で掛かる。少なくとも10人くらいでな」

「ふーん……レベル上がるんじゃない訳だ。集団でタコ殴りとか、入るもんも入らないよね」

経験値はパーティを組んでもソロでもあまり変わらないが、パーティを組まずに共闘すると、トドメを刺した者にしか入らない。また、HPの少なくなつた敵を倒しても本来の経験値は得られず、かなり減つてしまつ。

なので基本的に集団で狩る際はパーティを組むのだ。ただしレベ

ル差が激しい場合取得経験値に差が出てしまったりするので、そこはまた別の話だが。

「そういえば、どれくらい騎士団にいるの？……あと何歳って事になつてるの？」

「15年居る。最初の時は18歳と言つたから、33歳という事になつている」

「1000いくつのくせにね」

「お前もだらうが」

「……いや、ほんとは寝てた訳じゃなくて氣づいたら荒野に居たんだよね。直前までは仲間と街に居たし、千年前だつたよ」

「……そなのか？ タイムスリップ、とかいう奴か」

「そうかもね」

ほんとは異世界トリップだけど、といふ言葉は口にしない。

流石に、この世界で生きている生き物に向かつて、お前らはゲームのデータでしかないとは言えない。それに、トリップと言つと説明がつかないので。何しろ、千年前にプレイヤー達は確かに存在していたというのだから。

所詮造られた世界だと否定するのは簡単だが、生憎のことリノは楽天家の快樂主義である。人間関係の面倒」とは嫌だが、適度な楽しみとスリルは望む所だ。

「それより、もう少し歴史を教えてよ。いつ頃人間の手助けなんて始めたの？」

「俺は最初は600年くらい前だ。全体としては結構最近で、300年くらい前にいよいよのつべきならない事態になりかけて人類が滅びたら、戻つて来た主が困るのではないか、という意見があつてな」

「どんだけ……」

マスター「コンプレックスと名付けてもいいかもしない域である。ヴィックルは真剣な顔で続けた。

「それまでは主君以外に従つたり、手助けしたり、という発想が無かつた。しかし商売に携わっていた奴らから段々輪が広まって、今では大陸全体で同盟として活動している」

「ほー……話がでつかいね。同盟の名前は？」

「いつまでも主人を待つ者たちの同盟」

「せつなすぎるんだけど」

「略して、ISMだ」

「……ペツトつてもう少し…、……いや、真面目、なのかな」

「真剣だぞ、俺たちは」

「真剣にネタに走ってるよね」

ちなみにこの世界の言語は日本語、外来語もしつかり混じり、更に文字はひらがなカタカナ漢字にアルファベットである。レイスタイルは和製MMORPGだ。

ゲーム内特有の文字もあり、それらは情報の記録などに使われるという設定で、古代アルテイル文字と言われていた。言語化は出来ないが、見ると意味が分かるという物だ。

アルテイルとはレイスタイルでいう古代文明で、今ではレイスタイルが古代扱いなので言つなれば超古代文明。アルテイルの時代には神が地上に居たとされ、何らかの理由で神が去つて魔物が現れ、それから数千年後の時代がレイスタイルの舞台だ。

一応レイスタイルのメインシナリオはアルテイル時代の謎に関するもので、この先のアップデートで事実が判明していくのだろう、と思っていた矢先の出来事だったが。

「しかし設立300年の同盟か。盟主は？」

「リーゼ・ディヴィайн様だ。知つていいか？」

「……ああ、^{ハイランダー}至高人認定と特殊技能の……って、その人がペット！？」

「の方に主は居ないぞ。単に死んでいない中で一番強いからだ」

リーゼ・ディヴィайнは^{ハイランダー}至高人認定クエストと^{エクストラ}特殊技能習得クエストを出してくれるNPCだ。それぞれのクエストは彼が^{ハイランダー}至高人の境地に辿り付いた時にやつた修行、らしい。当然全NPC・モンスター中最高峰のステータスを持つが、現世には関与できないらしい。ちなみに種族・ジョブ共に当時は彼限定、^{アーツ}半神族の仙人である。現世とは言うものの彼は空に浮かぶ島で霞ならぬ雲を食べて生きていて、基本的には世界のどこかで下を見下ろして楽しんでいるらしい。

「よく行けたね」

「……あんな。ペットにはモンスターも居るんだ」

「あ、そつか。飛べるね」

ぽん、と納得して手を叩く。遠くに小さく森が見え始めていた。

牛頭一家と遊び人

夕方「じる、森のあたりまで辿り付いた。徒歩としてはかなり早い到着である。

数十キロ程度歩いたと思われるが、リノは全く疲労を感じていなかつた。脇と胸あたりが僅かに汗で湿り、乾燥した空氣のせいで少し鼻が痛い程度だ。

森の側に住んでいるという牛頭族(ノタウロス)、大柄な牛頭の男ノッダルに出来られた。彼は一家でここに暮らしているらしい。

「ヴィク、大丈夫だったか?」

「ああ。行つた時には解決していた」

「そりやあ良かつたな。腕利きの傭兵でも居たか」

「……いや……」

ちらりとリノを見る。彼女は明後日の方向を見つつ、ちら、と一瞬睨んできた。

「まあ、そんなものだ」

ヴィックルはそう誤魔化して、泊めてもらえたるよつに頼んだ。

彼は息子と娘と暮らしており、よく此処を通る旅人や冒険者に部屋を貸しているらしい。魔除けの柵があるため、小規模なキャンプ

も気兼ねなく出来る。

森を通る商隊なども世話になつてゐるよつだ。

「また熊どもが降りて来たみたいだからな。行きに片付けてくれ」「ああ、分かつた。リノはいいか?」「構わないよ」

2人ともが頷く。リノもこの辺りで経験を積みたいところだし、悪い話ではない。

何しに未だ、意図的に生物を殺した経験かほとんど無いのだ。忌避や嫌悪がどうこうの問題ですらない。VRゲームはある程度嗜んでいるので戦闘 자체は問題なくとも、血が出たりするリアルな戦闘に己がどう反応するのか、リノ自身予想が付かないのだ。

「じゃ、泊まつて行け。ホイシユも待つてゐぞ」

「嬢ちゃんもどうだ、ひかのアガの嫁にならんか」「謹んで！」遠慮するよ

息子はアガ、娘はホイシュというらしい。

若干顔を青ざめさせたヴァイツクルの背中を押し、3人は小ちんまりとした丈夫そうなログハウスに足を踏み入れた。そして2人を出迎えたのは苛烈な洗礼である。

飛び出してきたのは少女だつた。といつてもリノより背が高く胸も大きく全体的にむつちりしていて、まさに牛女だ。しかし顔は人間で、小さな角があり、牛のような耳がついている。

ヴィックルは極めて冷静に体を横にずらした。そのまま勢い任せ

に少女は外に飛び出し、思い切り顔面から地面に突っ込む。

「あつ……」

リノは小さく声を上げ、一瞬助けようか助けまいか迷った。しかし少女はぱつと起き上ると、またヴィックルに突撃していく。

「何で避けるのよ未来の旦那様あつ！」

「誰がだつ！？」

「あ・な・た！」

避ける、突撃される、更に避ける、それを五回ほどループしたりでリノは観察を止めた。恐ろしく生産性のない行為だと思った。ひとまずなげなしの礼儀を駆使してノッダルに改めて挨拶し、乱雑に撫でられて照れるやら痛いやら微妙な顔をした。

「ホイシユ」

そういうじてているうちにホイシユは兄によつて首根っこを掴まれて漸く停止したらしい。外から戻つて来た兄・アガは、ノッダルよりや低い背で、なんとなく寡黙な雰囲気がする。

「よう、アガ」

「久しぶりだな」

アガはゆつたりと挨拶し、暴れるホイシユを隣室に放り込んでドアを閉めた。乱雑な扱いだが、何時もの事らしい。

「そつちば」

リノはその声の対象が自分だと分かると、なるたけ丁寧に見える
ように挨拶した。昔からどう頑張っても慇懃無礼だと言われる性質
で、苦労する事もある。根底に目上への反抗心があるためか、ます
ます目の仇にされるタイプだった。

「俺はアガだ」

「どうも」

知ってるけど、とは言わない。軽く頭を下げ、いつもの通り笑み
を浮かべる。優しげではなく、むしろ人をからかうような楽しげな
笑みだ。

アガは暫くじつとリノを見て、不意に手をぼすんと頭に載せた。

「ちまつこいな」

「……ちまつこい！？」

女子としては低い方でも無い160センチメートルを小さいと言
い切られ、リノは巨大な手を払い除けて睨んだ。アガの背は確かに
大きい。2メートルをかなり超えているように見える。

「おお」

細腕が易々と手を払いのけた事に感動したらしい。アガはがしが
しと更にリノの頭を乱暴に撫で、ますます怒らせる事となつた。

夕食は猪肉を焼いたものや、キノコや野菜の入ったサラダ、それ
からスープにパン。これでも普段よりは頑張ってるんだぞ、と自慢
げに言われた。

リノもキッチンを借り、このあたりでは食べられなさそうな食材

で料理を提供した。アサリのバター炒めは中々好評であった。

「うめえな、これ！」

「うちにお嫁に来ない？」

ホイシユにかなり真剣な目で言われた。アガ本人までもこくこくと頷いており、リノは唸りながら必死に首を横に振った。流石に異世界に来てから数日で嫁入りは遠慮したい。ついでに言うと人間の顔をしている相手が望ましい。更に言つなら、本来の自分を知る者だと尚良い。

鏡を見たところ、前の自分より随分整つた顔をしていたため、恋愛に精を出す気には到底なれないのだ。尤も、元々興味も経験も無いのだが。

その日はホイシユの部屋に毛布を大量に重ねて敷き、古臭いベッドよりよっぽど柔らかな寝床で眠つた。目が覚めるとホイシユが転がり込んでいたのはご愛嬌である。

翌朝、リノは紺の布を銀糸で彩つたブレザーに紺のスカート姿に着替えた。これはギルド【アルテマ】に2種類ある制服のうち、物理特化版のものだ。

魔力・知力・器用・魅力・幸運の80%ずつを足して4分し、体力・筋力・耐久・敏捷に均等に振り分ける。とことん固く強く、というコンセプトのある意味ネタ装備だ。もう一つの方は白で、そちらは逆バージョンである。コンセプトはそれぞれ、脳筋と紙防御。胸元には槍花車に山桜の紋という和洋折衷なギルド紋章が輝いている。

「……何だそれ、貴族みたいだな

「つひの制服」

暑い、といつて上着を脱ぎワイシャツだけの状態で朝食を作る。のんびりした牛一家はまだ起きてこなかつた。

今度は面倒なので調理スキルを使う。キッチンに置いた食材はふわりと浮かんで光を発し、勝手に調理されてホットサンドになる。

食べ物アイテムは様々効果を持つ補助アイテムだ。料理の生産スキルによつて作られるそれらは、高レベルになるにつれて必要性を増していく。

特に遊び人は戦闘に役立つ類のステータスは心許ない。なので、身内以外との狩りでは必須といつてもいいようなものだつた。

生産スキルの中では比較的材料を揃えやすく使用頻度も高くなるため、上がりやすい。

ちなみにこのホットサンドだが、攻撃ダメージ + 5%。たかが 5 %、されど 5 % である。

与えるダメージが高ければ高い程効果が高くなるため、人気は高い。

い。

「ノッダルさん達が起きたらすぐ行く?」

「そうだな。俺達の脚なら、急げば 2 日程度で王都だ

味も申し分ない美味さのホットサンドをぱくつきながら、今後の予定を確かめる。王都まではヴィックルが徒步で急いで 3 日、だそうだ。本来馬車、精々騎獣で 4、5 日はかける道のりらしいが、やはり高レベルプレイヤーは体力も速度も段違いなのである。

更にこの時代、かつて使われたようなレベルの高い騎獣が捕獲できない。結果的に馬ばかりになってしまい、更に昔よりも移動速度

は落ちた。

「……思つたんだけど」

「何だ?」

「ランバード。乗つてく?」

ランバード。その騎獣の代表格で、見た目はダチョウに似ているが首が太めでやや前の方についている。足はかなりがっしりとして、人間一人なら樂々乗せて走る事が出来る。色はレベル帯ごとに別れて数色あり、まあようするにチョボのような鳥だ。

下からレベル50程度の赤と青、200程度の緑と紫、400程度の橙と水色、500~1000は白と黒、稀に金銀。

リノは全色コンプリートした。足の早い高レベル種1匹さえ居れば問題ないので、完全に道楽である。

「居るのか。乗れば1日短縮できるな」

「うん。僕の、金のと銀のが居るし」

金と銀はそれぞれ一般モンスターではなく中ボス的な存在で、常に1匹しか居ない。そのため現れる度に血眼で捜されてすぐに仕留められていた。

リノが2匹を捕獲できたのは全くの幸運だった。

ゲーム内では騎乗すると速度がプラスされる代わりに命中率がかなり下がるが、今ならば訓練次第でどうにかなるだろう。

「そうか……ああ、熊退治だが、それは問題ないな?」

「久しぶりに戦うからフォローしてね」

「ああ」

久しぶりというか本当は始めてに近い。樂器でも十分に戦えるだ

りうが、今回はちゃんと戦闘に慣れるために普通の武器を使おう、
とリノは決めていた。

普通とは言つても持つてゐる武器は遊び人専用品ばかりで、あまり武器とこゝ感覚はしないのだが。

しかし近接武器から遠隔武器まで一通り揃つてゐるため、割と何でもこなせるのだ。それこそペンから剣まである。武器の種類数では盗賊シーフや探求者シーカーにも勝るとも劣らざだつたりする。

「おはようおー……」

ばたん、とドアが開く。入ってきたのはホイシューで、ヴィックルを見るなりぱつと目を輝かせるのが愛らしい。ホイシューはヴィックルが好きなようだが、仲良くしてゐるからといつて己に敵愾心を向けたりしないためそろそろ気に入つてゐた。昔そういう経験があつたためだ。

「おはよう。朝^ヒはんあるよ」

「あやあー、すいしー、おいしそー、リノちゃん天才！」

ホイシューはヴィックルの隣に座り、ホットサンドを取つて食べ始める。ヴィックルはガタンと音を立てて立ち上がり、「空氣吸つてくる……」と呟いて出て行つた。

「まあまあまあ、ヴィックル。少しくらい固てあげてもいいじゃないか」

「このまま隣に居ると食わせようとしてくるんだ
「未来の夫婦だもの！」

リノは他人事なので牛頭族ミノタウロスと狼人族ワーウルフに考へていた。ヴィックルが逃げ出すと残念そうにホイシューがく

ねぐねと体を揺らしていく。

「んもう、恥ずかしがり屋さんつ」

恋する乙女って強い。リノはそう学んだのであった。

アガとノッダルが起きて来て、朝食を食べ終えると早速熊退治に出る事にした。リノはスキルをフル活用して熊の居る場所を探し出し、ヴィックルと共に向かう。

武器は剣である。少し驚かれたが、本来の使用法には全く従わないでの問題無い。

「あそこに居るな」

近づけばヴィックルも匂いで分かるようだ。一応慎重に近づき、のしのしと歩く巨大な影に背後から近づいていく。

「じゃあ行くか。レベル差は大きいが、一応気をつけひよ
「うい」

今は核兵器でも死にそうにないHPであるとはいえ、痛みでショック死する可能性は無きにしも非ず。つっかり倒れこんできた木に潰されたりしたらどうなるか分からぬ。そもそも、HPがちゃんと機能するのかも分からぬ。

リノはしっかりと剣を握り締め、締め付けられるような不快感を胸に感じながらスキルを発動した。

「えいっ！」

『増殖幻影』^{インクレス}

は手に持った物を質量ある幻影として増やし、操るスキルだ。手に持った剣は使わず、浮いた剣で熊を突き刺す。

H Pは一撃で尽き、熊は声も無く地面に倒れ付す。

「Jの調子なら大丈夫だな。まだ2、3匹居るらしいから2手に分かれよう」「うん。じゃあ、僕は右に行くから」

「ああ、と言つてヴィックルが去つていく。そしてリノは剣を地面に突き立てると、はあ、と溜息を吐いて木に凭れた。

「……嫌だな、殺生は」

千年前に生きていたという、突然与えられた後付の過去。それは案外重く压し掛かる。何せ、自分は戦いに生きていた者だと信じられていて そしてリノも、否定する気はない。迂闊だつたとしか言い様が無いが、すっかりその“リノ”と同一人物である、と話していたのだ。弱味など、見せられない。

主を失つた彼らにとつて、自分は唯一の希望だ。
もしかすると自分の主も現れるのかもしれない、そう思わせる希望。

「全く、馬鹿らしい」

ヴィックルの忠臣ぶりに絆されたか、とひとりごちる。元の世界では人に尽くす事など滅多に無いリノだが、現代社会にはとうに見られなくなつたその“忠誠心”に柄にも無く感動してしまつたのかもしれない。だから、精々英雄を演じてやろう、と思つたのだ。

けれど、せめて それを共有できる仲間くらいは、居て欲しかった。

牛頭一家と遊び人（後書き）

普段余裕ぶつてる子の弱つた姿ほど燃えるものは無い！

王都へゆく遊び人

木に登り、リュートで曲を奏でる。モンスターを誘う効果のある『食人花の囁き』で、ふらふらと熊が2匹集まって来た。『増殖幻影』^{インクリ}で1匹殺す。

最後の1匹は、己の手で剣を振るつ。やはり命を刈り取る感覺はお世辞にも気持ち良いとは言えなかつたが、これにも慣れるほか無いだろう。

「……まあ、ぶつちやけ必要無いけどねえ」

戦闘になつたとして、わざわざ剣で応戦する必要も無い。むしろ対多数ならば、演奏スキルの方がよっぽど向いている。聞こえる範囲全て殲滅できるのだから、よく考えてみればとてつもなくチートだ。

リノは残つていた剣を消し、実物もボックスに戻した。

死体を2つ引き摺つて先程の所に戻ると、ヴィックルも1匹仕留めてきた所だった。

「2匹、よろしく」

「お前は運べるか? ……いや、邪推だな」

流石に大きさ的に持ち上げにくいため、『念動力』で浮かせて運ぶ。ヴィックルは真っ直ぐ森の外に向かい、そしてあっさりと抜けた。やはり嗅覚がかなり良いようである。

庭先にどさりと熊を落とし、おーい、と薪割りをしていたアガに声を掛ける。

「……4匹か。3匹かと思っていたが」

「見つけてない奴だつたんだろ」

「そうだな。有り難い」

アガは熊の死体を検分しつつ、じろり、とリノを見る。

「……お前も、戦ったのか？」

「まあ。2匹は仕留めたけど」

「そつか」

何故か嬉しそうな目で死体を解体し始めた。不気味である。

リノは胡乱な目つきでそれを見つつ、じゃあ後は任せて出発しう、とヴィックルに声を掛け

「きやああ、ヴィックル、う！　かあつ、こいいー！」

「来るな！」

ようとして、諦めてノッダルに挨拶しに行つた。

1時間ほどしてから漸く出発した。金銀の艶やかな毛並みをしたランバードは、大きめの嘴に駄鳥のような体と、太い首と足を持った鳥である。

「久しぶりだから感覚が掴めないな」

実際はポーーくらいしか乗った事が無い。真っ赤な嘘である。身体能力はこれでもかという程強化されているので、乗る事には問題が無い。鞍に跨つて手綱を握ればそれだけでいい。

また幸運な事に、何故か彼らの言葉が理解できた。

『お嬢様、どうひらへ？』

丁寧口調な銀色のランバード、ヤンバル。耳に届くのは「クルルルル」という鳴き声だが、頭には言葉が入つてくる。

『何だかこのあたりも変わったねえ』

のんびりした金色のランバード、クイナ。ヤンより落ち着き無く動き回り、彼に乗るヴィックルに宥められて鳴いている。2匹合わせてヤンバルクイナだ。

ハンシンのような神獣系のモンスターは元々喋る。しかしランバードは紛れもなく、喋らない類のモンスターである。

(……妖精のはしくれだから?)

とりあえずはそういう事にして、どう話しかければいいのかよく分からなかつたため、ヴィックルに方向を確かめてから指差した。

『戻りました』

リノがほんの小声で「よろしく」と言しながら首を撫ると、嬉しげな意思だけが伝わる鳴き声が帰ってきた。

ランバードはメジャーな騎獣だけあって、上下の揺れも少なく、また無意識に風を操つて主に抵抗を「え」ない術を知っているため快適に乗れる。

適度に頬を撫でる風は心地よく、勝手に目的地に向かってくれる優秀なペットに任せてリノは景色を見ていた。

「飽きた」

「我慢しろ」

「だるい」

「我慢しろ」

「眠い」

「落ちてもいいなら寝ろ」

「ひどいー」

しかし元より移動にロマンを見出せないタイプである。景色よりは町の方が好きだ。最初こそ鬱蒼とした森も神秘的に見えたが、よく考えればもう入った場所だ。

リノの我慢も親しさ故の気安さから生まれるもので、まあ度が過ぎなければ、ヴィックルも気にしない。何せリノと違い、彼は正真正銘千歳以上。精神的に老成されている。

「あ

不意に声を上げる。リノの視線の遙か先に、僅かな明るみが見えていた。

「良かつたな。景色が変わるぞ」

車のよつな速さで駆けているため、見えた明かり　森の出口はすぐ近くにいて、あつという間に通り過ぎた。

今度は荒野ではない。短い草が生い茂った広い草原となだらかな丘がある。

「ますますつまんないし……」

不服げに呴いたリノは、今度こそ氣だるげにヤンバルの首に腕を巻きつけてぐつたりとした。元の世界にもありそうな草原には、動物やモンスターの影もあまり無い。

トランプを出して弄びながら、暇な道程は続いていった。

それから3時間ほど経ち、休憩を入れる事にした。少し脇道に逸れた所に川があり、そこでランバード達も休ませる。リノは食材を取り出してスキルでサンドwichを作り、地べたに座つてかぶりついた。

「後どれくらい？」

「6、7時間つて所だな。思つたより早い」

「うー……もつと早く」

「金銀のは初めてだが、まあもう少しねらへせるんじゃないかな」

さうなの、といつてヤンバルとクイナを見る。彼らは頭を上げて自信ありげに叫んでいた。

『今までの倍は出せます』

『一休みするよ』

「倍はいけるって」

「鳥と会話できるのか、お前は

「さあ？」

とりあえず誤魔化しつつ食べ終え、お茶を取り出して少し飲んだ。水筒ではなくポーション用大瓶と同じ容器に入っているため、なんとなく薬でも飲んでいる気分になるが。

容器は大きさも用途も様々で、主に料理と鍊金の生産スキルに使用する。鍊金は主に薬や毒などを、料理は液体調味料や飲み物を生産できる。

容器のサイズが大きければ必要な材料の量も増えるし、再使用可能時間も長くなる。しかし効果時間も長くなるし、大きければ大きい程得だつたりもする。

また使用する瞬間はスキルが発動できないため、自分のスタイルに合わせて調合する事が推奨される。この硬直時間も容器のサイズによつて長くなる。最長で2秒程度だが、それでも隙になるのだ。店売りP.O.T（Potionの略）は初心者まで、が合言葉である。

ちなみにポーション類は投げて当てれば他人にも効果が出る。この場合拘束時間は無いが、少しHPが減る事もある。たまにこれでトドメを刺される事があるため注意が必要だ。

「じゃ、行こうか」

「ああ」

餌と水で十分に元気になつたランバード達は、張り切つた様子で鳴き声を上げた。リノは出た時より慣れた様子で鞍に跨る。今度は行きと逆に、リノがクイナに乗つた。

ヴィックルもヤンバルに乗つて、合図すると同時に2匹は競うようになびけ出した。

現在の王都がある場所は、ゲームではアティナという都市があった。なかなか大きな都市だったが、今は更に大きい上に外壁の中心に城を建設し、更に外側に壁を増やし、と曰大化していっているらしい。

リノとヴィックルは今のアーティアレストについて話しながら、割とどんなでもない速度で進んでいた。具体的に言えば時速2百キロ弱出でいる。

「へー、ヴィックルは真紅隊」

「ああ」

アーティアレストの騎士団は軍と似たようなもので、第一から第五まである。それぞれ色が決まっており、隊の名も同じ。紺碧、紫紺、真紅、山吹、若竹とある。

Jの世界の公用語は一応日本語なのでおかしい訳では無いが、リノからすれば国自体が西洋風なのにこの名前なのはなかなか不思議というか中二病じみて見える。

序列は無いが、紺碧と紫紺には貴族出身が多く、真紅は貴族平民問わず実力者が入り混じり、若竹と山吹は殆ど平民出身だ。

また、真紅隊には武術大会等で上位に入った者が多いらしい。

「普通は貴族、平民、で纏まるんだがな。だからつちは色物だと言われる」

「へえ。仲良い?」

「隊の中ではな。貴族の騎士を指して青紫、平民の騎士を指して黄緑と言うんだが、内部は仲が良くとも隊同士で対立している。当たり前といえば当たり前だが」

「ふーん……」

「貴族からは平民とつるむ恥知らず、平民からは貴族に『与』する裏切りもの、そんな感じに見られるのが現状だ」

仕方ない、といつよろに溜息を吐く。人間を見守ってきたからこそ、その現状に呆れるやら心配するやらの複雑な気持ちなのだろう。彼自身は貴族ではないが平民とも言えない立場だが、数多くの死を見ている故に、人間が根本的なところで平等だと知っている。だからこそ、死んでも復活する自分たちを人間の枠から外して考えているのかもしれない。

「貴族と平民が対立する自体、何か違うような気もするけど」

支配する側される側。同時に、奉仕し合うべきでもある。民のために善政を敷き、領主のために労働するのが正しい在り方。というのがリノの認識する建前だ。無論、そうできる人もいればできない人も居ると分かっている。

「貴族つつつてもな。今じゃ領地持ちの貴族なんか一握りで、殆どただの金持ちと変わらないからな」

「あー……。人の住める場所が減つたから?」

「ああ。今は配下として領主の所に別の貴族が派遣される形になつていてな」

(……与力大名みたいな物かな?)

なんとなくそう解釈する。同時に、プライドの高そうなイメージのある貴族がよく了承できたものだと思つた。ヴィックルはその考えを読んだように笑う。

「一時は本当に大変だつたんだ、この国も」

「ふーん……」

「まあ、そのお陰で貴賤を問わずに実力者を引き入れ、戦力の育成にも力を入れるようになつたからな」

「不幸中の幸いだね」

「それまでは騎士団ではなく軍で、平民は等しく兵士でしかなかつたからな。今ではこうして平民も人を率いる事が出来る。あるべき形に戻つたとも言つが」

確かにそれもそうだ。元よりゲームでは何の身分もない冒険者が大規模戦闘の陣頭指揮を取つていた。

実力者が上に立つべきなのは当然だし、元の世界より尚更実力主義であるべきなのがこの世界だ。お飾りの指揮官などを就けていれば、命が幾つあつても足りない。

「なるほどねえ」

草原地帯から林に差し掛かる。少しづつ葉の増え始めたような様子の木を見て、リノは漸く今が春なのだとつと思つた。前に通つた森は恐らく常緑樹ばかりだったのだろう。

薄つすらと空気は肌寒いが日光が暖かい。こんな日は家ですつと布団に潜つていたかつた、と思つた。

王都 アティナータの巨大壁が見え始めたのはそれから1時間程の事だ。

遠目に見ても、とてつもなく大きい。視界に入る地平線の三分の一程もあるその縦横に巨大な壁には、流石にリノも感嘆した。

「へー、すごい」

「……それだけか」

「これでも感動してる方だけど」

ややスピードを落としながら近づく。段々と大きくなる壁の高さは、元の世界でもそろそろ無いようなものだ。

地面の間際にちんまりと見えるのが入り口だらう。遠いから、やや小さく見えているが、恐らく近づけばもっと大きい筈だ。

「……うふ」

「？ 何笑ってんだ」

リノは楽しげに笑う。スキルではなく、生まれ持った彼女の直感が“面白いもの”がある、と告げていた。
それが何であるかは、まだ分からぬ。

「楽しみだなって」

「そうか。……そいいや、王都に着いたりびつするつもりだ？ 宿くらいは紹介できるが」

「暫く滞在して情報集めかな。そういうえば今の時代って、クエスト依頼はどうやって受けるの？」

「世界規模の組織が仲介してるぞ。たしか3、400年くらい前からやつてるんだっとか」

「……アバウトだなあ」

長生きするとこいつも時間の感覚が適当になるのか、トリノは溜息を吐いた。

王都へゆく遊び人（後書き）

ランバードはトリウマ（ナウシカのあれ）かチヨ
ボだと思つてく
ださい

騎士であるヴィックルがいるため、王都に入るのは簡単であった。本来身分のない者はもう少し手続きに時間がかかるのだが、ヴィックルは下っ端ではなく多少の地位があるので割と融通が利くらしい。

「権力もたまにはいいものだね」
「……まあ、その分責任も伴うがな。で、どうする？」
「んんー……まあ、居心地の良さそうな宿を紹介してくれるかな。
高くてもいいから」

初めて見る街並みを興味深そうに見る。ゲームでの街並みよりもリアルさは増し、人は多い。雰囲気はヨーロッパとアジアの中間だが、あまり発展はしていなそうだ。衛生状態は悪すぎる程では無いが良いとも言えない。

今いるのは外から一枚目の壁の内側だ。一番外側のあたりにはのどかな田園地帯が広がり、内側に行くに連れて家々が並んでいた。そしてもう一枚の内側に入れば打って変わつて賑やかな街が広がり、喧騒を見せている。

「どうせならもう一つ上の層に行くか？ 治安も良いし
「別に治安はどうでもいいんだけど」

「いくら強くても数の暴力は侮れん。集団で襲われたらどうする」「……まあ、そうだけど。体力は無いしね」

治安は確かに良くはない。荒々しい男たちが闊歩しているのは仕方ないのかもしかつた。基本的に冒険者や傭兵はこの層を拠点にしているからだ。

1つ上の層には下級貴族の屋敷や高級な店が並んでるらしい。

「！」だけの話だが、殺人事件が増えている。巻き込まれたくないだろう

「それはそうだね。よし、あの宿にしようか」

「人の話聞いてたか？」

「よく聞こえたよ」

笑顔で言うリノに、ヴィックルは盛大な溜息を吐いた。

安宿に泊まるのをするのを引き止めつつヴィックルが紹介したのは、この付近では高めだがしつかりした建物の清潔な宿だつた。四角く白い建物の外側には洒落た窓やベランダがあり、観葉植物なども置いてあって中々美しい外観である。

中に入ればちょっとしたホテルのロビーのような空間が広がつてゐる。建物 자체がそう大きくないため広さは無いが、幾つかテーブルや椅子が置かれ、談笑している者も居た。

「部屋、空いてるか？」

「おやおやこれは騎士殿。2人部屋でございましたら一度空いております」

「……何をニヤニヤしてるんだお前はっ！ 1人部屋だ1人部屋。俺は宿舎に住んでると知つてたいるだろうが」

「ええ、存じておりますよ。しかし騎士団の宿舎にて女性は連れ込めませんしねえ」

「だつ……！」

どこにいても苦労人らしい。放つておけば際限なくからかわれ続けそうだったので、リノは助け舟を出した。

「ヴィックルには牛頭族ミタウロスの可愛い彼女が居るかい。僕は友達だよ」「おまつ……おい！」

全く助け舟になつていないが。

受付の男性は白髪の混じつた初老の男性だ。10日滞在で三食付きと伝えつつ、ポケットに手を突っ込んで見えないように金貨を取り出す。代金は日本円に換算するとかなり高いが、そもそも向こうでホテルに泊まる経験もさほど無かつたりノハ、これくらいか、と思いつつカウンターに金貨を置く。

男性は驚く様子もなく受け取り、お釣りを返す。幾らかの銀貨と晶貨、銅貨だ。よく考えると全て始めて見るものだが、今は觀察したりせず無造作にポケットに入れた。

「こちらが鍵になります。宿を出る際はこちにお預けください」「うん」

「お食事の方はあちらの食堂で。前口までに仰ってくださいればお部屋にお届けする事も出来ます」

「なるほど。……ああ、じゃあ朝食は毎朝、7時に部屋によろしく」「畏まりました」

つまりルームサービスだらうか。なかなかサービスの行き届いた宿で、説明を聞くたびリノは感心した。高いのも頷ける。

「こやかに案内を申し出たが、ヴィックルにやらせるから、

と断る。どうやら何度も泊まつた事があり、しつかり建物を把握しているようだつた。

鍵に書かれた部屋番号は、7号室。階段を上がつて、廊下の一番奥にある部屋だつた。

「じゃ、ありがとね」

「ああ。何か用があつたら、真紅隊の第7屯所に来い。場所は人に聞け。いいな？」

「世話焼きのお父さんだね、本当に。わかつたつて」

すっかり情が移つたかもしない。何度も確認しつつ、ヴィックルは去つて行つた。取つていた休暇の日数的には既にアウトらしげ、クビにならなきやいいな、トリノはとりあえず祈つておいた。もはや認識はリストラ寸前の過保護なサラリーマンお父さんである。

部屋に入ると、そこは小奇麗なごく普通のホテルの一室のように見えた。白い壁、落ち着いた紫のラグ、これまた白いテーブルと椅子、ベッド、カウチ。

この部屋だけを見れば、全くゲームの世界とは思えない。リノは靴を手早く脱ぎ捨て、ぼすんと柔らかなベッドに埋もれる。

（疲れた）

1人になると、途端に気持ちが沈む。人が居るのも疲れるが、人が居ないのも嫌いだ。

こういう時、いつも居てくれたのは幼馴染だつた。

（……居ないなんて、そんな訳は無いさ）

リノは白い指でシーツを握り締めた。

同じ世界にいらないなど、想像も付かない。それほどまでに、常に繋がりがあつて、離れることなど無かつた幼馴染。

それが、今は一筋の糸すら見えない。

(そんなわけ、……)

浅い息を繰り返す。抱いたことのない感情が、じわじわと喉からこみ上げるようにして溜息に変わる。ぽつりと、吐き出すように何かを呟いて、リノはそつと目を閉じた。

目が覚めると日は暮れていた。ぼんやりと空の一部だけが僅かに明るく、日が落ちたばかりだと判断する。

「「」はん……」

きゅう、と腹が鳴る。着替えも面倒なので、アイテムから服を選択して一瞬で着替えた。

モノトーンのワンピースにニットのカーディガン。装備アイテムではなく、効果のあまりない衣装アイテムだ。こうして見れば、どこぞのお嬢様に見えなくもない。

リノは鍵を手に取り、部屋を出た。

食堂は案外広く、落ち着いた雰囲気だった。白いテーブルクロスの掛けられた丸いテーブルが幾つも並んでいて、食堂という言葉の大衆的なイメージが無い。生意氣にも間接照明で照らされ、ムードがある。なかなかやるな、とリノは感心した。

適当なテーブルに着くと、すぐに給仕がやって来る。食べられな

いものは無いかだけ聞かれ、リノは「虫と蛙と蝸牛は食べられない」と述べた。出しませんよ、と笑われたが。

この世界の食事事情は、日本とさして変わらぬ和洋折衷ぶりで、珍味の類はあまりない。精々モンスター類の肉が出たりする程度だ。そのモンスターに色々とアレなものが含まれていたりするのだが。昔、というかゲームでは食材としてドラゴン肉などがあったが、今となつてはレア食材になつている。単純に、倒す事が出来ないのだろう。

百人がかりの力押しでやつと150～180レベルのドラゴンが倒せる、程度だ。そもそもステータスに非常に恵まれているドラゴンは、レベルが低くとも脅威となる。

「お待たせいたしました」

つまりドラゴンを狩れば一攫千金じゃないだらうか。

リノの脳裏にそんな思考が過ぎつたとき、料理が運ばれてきた。人だった時よりもかなり鋭敏な嗅覚が、その匂いを捉える。

（これは……）

「ごくりと喉を鳴らした。給仕の青年が笑みを浮かべ、テーブルの上にそれを置く。

「キリヤニカ卵のオムライスですよ」

（待て、なんかまた子ども扱いされてないか！）

茶髪に薫色の目をした温厚そうな青年は、にこにこと微笑ましげな顔で料理の説明を一通りして去つていった。リノは不服げにしていたものの、一口食べるなり満足げに微笑む。

美味しい。とてつもなく、美味かつた。

キリヤニカ鳥は鶏にも似た姿の、しかしありが、大型で色も様々な鳥だ。モンスターではあるが、ノンアクティブ、つまりプレイヤーを見ても攻撃してこないタイプである。

その卵は最高級品らしく、クエストでもよく対象になる。

リノはこれでもかといつほどゅうくりじゅうくりと味わって食べた。ちまちまと口に詰め込んでいく様子が小動物のよう可愛らしく、やたら視線が集まる。

やがて食堂も混んできて、テーブルが埋まり始めた。

「お嬢さん、相席して構わないかな」

ふ、と影が差す。顔を上げると、背の高い男であった。リノはまだ口に物が入っていたため、こくりと頷く。

テーブルは1人用ではなく2人用らしく、向かいにも椅子がある。

「ありがとう。いやあ、こんな可愛いお嬢さんの前が余ってるだなんて幸運だね」

なんとも氣障な台詞に、リノは嬉しがるもなく嫌そうに眉根を寄せた。氣色悪い。

金茶のウエーブした髪に緑の目をしていて、顔は整っている。美形すぎるという程でもないが、モテそうだ。

「……口説きたいのなら、あそこに綺麗な女性がいるじゃないか。
口つづり?」

自ら子供扱いしたが、それはそれ、これはこれである。利用する時は利用する。

男は怯まずに笑う。

「やだなあ。立派なレディじゃないか」

ぞわりと鳥肌が立つた。リノはこの手の男が嫌いだ。というか口説かれるのが嫌いだ。

隠す事無く不機嫌さを出すが、男はにこやかに給仕と会話して全く意に介さない。小娘の癪癩程度、どうにも思っていないかのように。

更にリノの機嫌は悪化した。子供扱い以上に小娘扱いは腹が立つ。

(とつとと食べて帰る)

憤懣やる方ない気持ちでスプーンを握り締める。握力が強化されている所為で、僅かにぐにゅりと形を変えた。それに気づきもせず、リノは食事を続ける。

先程までとは打って変わつて早食いだ。

「まあ、そう急がないで。ちょっと聞きたいんだけど

「……チツ」

隠す事なく舌打ちが出た。言つ事を聞く気はないのだが、次に男が言つた言葉に、リノはスプーンを動かす手を止める。

「金髪に青い目の中士についてね」

軽く目を見開く。驚いたが、余裕は捨てない。

リノはスプーンを置き、心を落ち着けるためにグラスを手にとつて、入っていた果物のミックスティーを喉に流し込む。またも子供扱いされている事は頭から飛んでいた。ちなみにこの世界では1

6歳から酒が飲める。リノは合法的に飲酒が出来るところの元の扱いであった。

「聞かせてもらひつむ

にや、と眼前の男が満足げに笑った。

「レオ、という青年が王都に現れたのはつい5日前」

レオ 玲央。本名と同じ、キャラクターの名前である。慣れ親しんだ幼馴染の名。嘘ではないようだ、と少し警戒を緩める。

「彼、とても巻き込まれ体质みたいでね。ついでにハーレム体质みたいで、本人は逃げてゐるのにやたらと事件に巻き込まれて、今は3人くらい女の子侍らせてたかな？」
「……」

びき、トリノの周囲の空気が凍つた。笑顔が怖い。前例があるため、その様子は簡単に想像が付いた。

容姿が変わっていようと、いや、むしろ良くなってしまってい

る。確実に、その体质は悪化しているのだろう。

「確か公爵令嬢と巫女と冒険者だったね。……おや、怒ってるのかな？」

「……いいや。人が探してあげてる最中に、女の子とキャラッキヤウフフしてると思うとねえ……腹が立つなあ。ああ、怒ってるのかな。で？」

「青い髪に金色の目をした猫妖精を探してゐて言つてたよ。……

ケット・シー

今時珍しいからすぐに分かつたけど、君の事だらうへ。でも、周りの子たちの所為でなかなか探しにもいけないらしくてね。で、僕らが買つて出た訳なんだけど」

更にいい笑顔になつた。それを見て、男が楽しげに問つ。

「で、実際どんな関係なの？」

「幼馴染」

「へえ？」

からかうよひで言わると、リノの浮上しかけていた機嫌が急降下する。

男は柳のよひで受け流し、涼しい顔で運ばれてきた食事を口に運びながら話を続けた。

「そつには見えないけど。彼、いくら言ひ寄られても流すし、あげくの果てに幼馴染が、とか言つてや。面白いよね」

「わあ面白い。……そういう発言が回りに勘違いさせるつていくら言つても分からんんだからなあ。悪癖といつか、もひ、……」

言葉を切る。「こつこつと笑いながら、内心で呪詛を吐く。

「君には全く気がない訳だね？ なるほど」

「で、居場所は？」

話に付き合ひづ氣もないらしく、リノは笑みを浮かべたまま言ひつ。男はにこにこと笑いながら、告げた。

「王城に滞在中だよ」

「それはどーも」

グラスを置く。テザートの最後の一 口を胃に収めると、リノは立ち上がる。

「もう行くの？ 残念だな」

「道化と道化じや相性悪いからね。手足が出ないうちに帰るよ」

「おやおや。愛しい彼に繋ぎを取つてほしくはないのかな」

「うざい」

最後に心底嫌そうな顔をして、リノは立ち上がった。一刻も早く、この胡散臭い男から離れたい。王城に滞在中のレオと知り合えていたという事は、城にいるような身分なのだろう。

まあそんな事はリノにとっては知った事ではないのだが、関わりたくない人種である事は確かだ。城くらいなら、行こうと思えば行ける。難しいことを考えなければ普通にジャンプして壁くらい飛び上がれる筈だし、体裁を気にするなら普通に行けば良い。

ゲーム時代の話だが、冒険者は城に入る事を許されていた筈だ。今でも然るべき手順を踏めば簡単に入る事が出来る、ヒヴィックルに聞いている。

嫌な感じの視線を背後に受けながら、リノは不機嫌顔のまま食堂を去つて行つた。

王都來訪の遊び人（後書き）

強気な女の子の弱つてる以下略は以下略

リノは部屋に戻り、軽くシャワーを浴びることにした。体を綺麗にしたいし、どうもイライラしているのですつ生きりしたかった。

「……しかし、あの馬鹿め」

青い髪を湯で流しながら、こらついたように呟く。しなやかな体を流れていくお湯は温かいが、リノを落ち着かせはしない。

一重の意味で腹立たしい。

「僕だつて、まともな女なら文句は言わなこさ。……だがね」

近く、そして遠い幼馴染に忠告するように呟く。

「君に惚れる女が何を嫌いか、熟慮していただきたいね」

冷たい壁にペとんと背中を付ける。そして、はっと顔を上げた。
恐る恐る背中に手を回し、つり、ヒトヒト濡らせていく。

(……何これ)

そこにはまるで尻尾の名残りのような、つんと飛び出た何かがあった。

リノは毒氣を抜かれ、溜息を付いて濡れた床に座り込む。
ケット・シ
猫妖精の体に、今だ謎が多い。

「あーもー……」

そして独り言を連発していた事に恥ずかしくなり、白い頬を僅かに染めた。

一晩寝て落ち着いたリノは、ひとまず再びヴィックルの所に行こう、と部屋を出た。そもそも城に殴りこみをかけようにも、場所すらよく知らないし、勝手が分からぬ。

カウンターに鍵を預けて第7駐屯所の場所を聞いた。

「通りを出て左に進んで、突き当たりを右に曲がればすぐお分かりになると思いますよ。

真っ赤な建物ですから」

リノは礼を言い、朝方の街に瀟洒な佇まいを見せる宿から出て通りを歩き出した。

このあたりは店は少なく、宿が並んでいる。突き当たりに差し掛かるとやや人通りが増え始め、どうやら朝市のようなものが行われ

ているのだと分かった。

布を敷き、新鮮な食材を売買する人々。中々縁の無い光景でもある。

とはいえた満腹であまり興味を見せないリノは、途中「じゅりつきらしき男に絡まれつつ普通に対処して引き摺つて歩いていた。ついでに駐屯所とやらに突き出そうと思ったのだ。

「たのもー」

両手が塞がっているので、足で扉を蹴り開く。
椅子にだらしなく座りうつらうつらとしていた男が、ぼうっとした顔でリノを見た。

「は？」

「ヴィックルなんとかっていう人に会いに来たんだけど。あとこれは、朝っぱらから人身売買活動に励もうとしてらっしゃった仕事熱心な人たちだけ。ああ、治安悪」

愚痴に皮肉を投入して、ついでに2人の男を投げるよう床に置く。気絶していた2名が呻いたが、気にしない。

男はぼんやりしたまま、とりあえずリノの言葉を頭の中で繰り返し、最初だけを実行する事にした。

「お前な……」

暫くすると呆れた顔のヴィックルがやって来る。リノは先程まで男が座っていた椅子に我が物顔で座つて手をひらひらと振つた。
先日からのストレスを発散したのでいい笑顔だ。

「城に行きたいんだけど」

開口一番そつまつと、その突拍子の無さに、ヴィックルが溜息を吐く。

「仕面でもする気か」

「え、頭沸いてる？　ないない」

「だろうな……何の用があるんだ？　まさか謁見とかしないよな？」
「ないない」

アーティアレストにおいて、城に入る事自体は案外簡単だ。申請すれば1時間足らずで審査が行われ、許可が出る。危険物の持ち込み禁止、目的を明確にする、その程度。

やはりゲームであつた頃の名残りなのだろう。ゲームでは許可も何もなく普通に立ち入れたし、王の間まで行つてうろついても何もなしだ。今は流石にそこまでではないが。

「探し人のがね。城に居るんだって」

楽しげだが、何故か薄ら寒い空気を感じた。手錠で氣絶していた男達をとりあえず拘束しつつ、ヴィックルは両腕をさする。

「そうか。……あー、なんだ、まあ繋ぎくらこはやつてやるから殴り込んだりするなよ」「やだなあ、」「やだなあ、」

そう言つて言葉を切る。その先が無い事に物凄く不安になつた。

「暴れないにしても、だ。侵入する気も無いんだな？　無いよな？」「うーん？」

「だからその曖昧な返事をやめろー！」

「この街で彼女に繋がりがある（と思われる）のはヴィックルと宿の主人くらいだ。何かやらかせば思い切り累が及ぶ。

リノは兎も角、ヴィックルはいくら格下とはいえ集団で掛かれればそう勝てはしない。剣騎士バスターである彼は、戦士ウォリアーほど攻撃力が無いのだ。負けないが、勝てない。そうなれば時間経過により徐々に不利になる。

まあそこまで考えるのも早計というものが、出来るだけ立場を悪くはしたくない。死んでも死なない彼らだが、疑われないためにも復活には出来るだけ時間を置く。ヴィックルはこの王都に愛着があり、主を待ちながらも出来る限り守りたいと思っている。

「心配しなくとも、いきなりそんな大それた事しないから」

脅かしすぎたか、と笑いながら言つ。

いきなり皇居にテロでも仕掛けようつなものだ。世界が変わり己の力が変わつても、心が変わらない以上やる気にはなれないし、出来るだけ人は相手にしたくない。

「…… どうか、信じていいんだな？」

「さあ？」

「おーー！」

心配だ。物凄く心配だ。リノは兎も角、突撃された城の面々の精神が心配である。散々おちょくられるのだろうな、と彼女の拠点を思い出して溜息を吐く。

「とりあえず、……まあ、手紙を書け」
「ああ、うん。筆記用具貸してくれる?」

「ああ。その前に、ここにいらを置いてくわ……。そういうやうんな風に絡んで来たんだ」

「……んー？　ああ、えつとね。ほんと腹立つんだけど、『お貴族様の娘が家出中かあ？　攫われたって文句言えねーぜ』ゲヘヘ』つて感じに」

「……」

「腕捕まれそうになつてね、条件反射で股蹴つちやつた。もう片方は腹に一発。てへ」

ヴィックルが沈痛な面持ちで2人を連れていく。

引き摺らずに持ち上げて連れていつたのは、果たして優しさなんか同情なのか、それとも別の物か。それは彼のみが知る事である。

リノは手紙をレオに預け、今度はこの街にあるというトイストア・リトルクラウンの支店に向かつていた。

ゲームではさほど力を入れておらず、一軒だけ店を作つて適当に商品を入れて放置状態だったのだが、どうやら今となつては各都市に支店を持つ老舗のようだ。

店主に設定したペットが悪徳商人エチゴヤだつたのも良かつたのかもしない。

悪徳商人はボスモンスターだ。主に銭を投げる。投げまくる。当たりとこちらの所持金は増えるが数秒行動を封じられた隙に、ジュラルミンケースやら宝石類が雨あられと降る。ダメージはえげつない。

とはい改心状態にあるペットとしては、知力と魅力が高いため交渉に適し、店番や店主として良く採用されるモンスターでもある。

「いらっしゃいませー」

ヴィックルに貰つたメモ通りに来てみれば、リノがデザインした店より大人しめの小奇麗に纏まつた店である。色とりどりの玩具類があり、目にも楽しい。

店員は確認してみると普通の人間……といつも、ホビットが多い。NPC限定種族であるホビットは、鼻が高く耳の長い小人で、身長は100cm程度だろうか。顔立ちは総じて西洋系である。

「……えーと」

来てはみたものの、どうするか。ペットが此処にいるのであれば会いたいが、どう言えれば会わせてもらえるのだろう。リノは手懃りに棚に置いてあるぬいぐるみを手に取つて眺めながら、ぼんやり考える。会つたからどうという訳でもないが、探していたのなら会う方が良いだろ？

「お客様、どういったものをお探しですか？」

「んー……？ ああ、僕か。そうだね、いたずら系のやつ」

特におもちゃが欲しい訳でもないが、店内に居るのだし折角なので品揃えも見たい。どうやら開店時のリノの好みはしっかりと反映されている。ペイントボールやらトラップ系のアイテムやらと各種取り揃えていたのは完全にリノの好みだった。

店員のホビット男性は悪戯系おもちゃのコーナーに案内してくれた。なんとも年齢不詳だが、どうやらリノを子供だと思つていてるようで微笑ましげな顔である。

(こや、おもちゃ屋に来ておいて子供扱いするなとは言えないけどさあ)

弟妹へのプレゼントを買いに来たとすら見てもらえないのは切な

い。

(160センチにまで伸ばしたつて言ひのひの扱い……)

毎日乳製品とにぼしを欠かさなかつた彼女としては切ないといつだ。

元の顔も童顔だつたが、今は整にすぎて更に童顔になつた。胸が大きくないことも原因のひとつだつ。小さくもないが、大きいとまでは言えない。

胸はいらないが、身長は欲しかつた。最初こそ自分より背の低かつた幼馴染に追いつこうとしていたのかかもしれないし、気紛れかもしれない。もう覚えていなかつた。

「 今帰つたわ。売れ行きは？ ふうん、そう、ゼロ、ゼロね……あああ今月どうしましょ……やつぱりまた小金稼ぎに行くしか無いのかしら」

昔懐かしいブーブークッシュョンを手に取つた時、そんな騒がしい声が聞こえてきた。若くはないが、張りのある女性の声だ。

女性はレジの側にあるらしい裏口から入つてきて、カウンター裏に立つて店内を見回す。すらりとした肢体で、街中ではあまり見ないパンツスーツ姿である。

「 つて、あら？ 珍しいこともあるわね。……いらっしゃいませ！」
「…………ん？」

張り上げた声に、リノが横を 通路の向こう側に見えるカウンターを見る。ド派手なピンク色に青のメッシュを1本入れたショートヘア、飾り付きの細いフレームの眼鏡を掛けた女性。爛々と輝く仕事への意欲が詰まったような目は燃えるような赤。

会社勤めよりは「ティックのオーナー」でもしてくるよつた雰囲気である。

とじうか玩具屋には全く似合わない彼女は、はつとしたよつて口を開けた。

(おや)

見覚えがある。　　という事は、そういう事か。
そう納得する前に、リノはカウンターを飛び越えた女性に熱い抱擁を受けていた。

「……うん？」

「わやああああああ！」

耳元で絶叫され、きいんと響いたそれに思わず耳を覆おつした
が女性の腕が邪魔して出来ない。結果、耳をつぶさく悲鳴にぎゅう
と目を瞑るしかなかつた。

「きやああああ！　『主人様あああああ！』

「ちょつ、つるるせこ！』

「お帰りなさいませえええええええつ！――！」

今度こそ鼓膜が破れるかと思つた。

悲鳴のスペシャリスト、泣き女のヴィヴィアン。リノがそ
名付け、更に容姿に魔改造を加えた彼女の悲鳴は、戦闘にも使
うだけに凶悪極まりなかつた。

べつたりとリノを抱き込んで離さない、ヴィヴィアンを適度にあしらいつつ、カウンター裏のスタッフルームに案内される。

一番いいソファに座られ、店員らしき女性に紅茶を出され。きびきびと店員に指示しながらも、きらきらと輝く赤い瞳は視線で抉りぬかんばかりにリノを見つめている。

ヴィックルの様子で想像はしていたものの、実際向けられると凄まじい忠誠心……もとい、執着または偏執、である。

「ご主人様……私、私ずっと待つておりました……うふ、ふふふ、なんて幸運かしら。私が1番にご主人様に会えるだなんて……」

「ハンシンとヤンバルとクイナには会ったけどね」

「あうっ！……あいつら、どうして知らせないのかしらっ、もう！ぬか喜びじゃない！でもお会いできて……うふ、うふふ、嬉しいですわ！」

とろけるような目で見つめながら腕が伸びてくる。リノは僅かに、ほんの僅かに口元を引き攣らせながらも笑顔を崩さなかつた。見上げた精神力である。

「えーと。」「う、支店なんだよね」

「はい！ 第一弓支店ですわ！」

「……いくつあるの？」

「五つ『ざこ』ます！ 店舗の維持と資金集めは万全です！」

何に使えばいいんだろうかそんなに、とリノは一瞬暗澹たる気持
ちになった。

経済状況の変化で恐ろしい大金を手にしてしまったところの弓、
更に増やす気なのか。というか既に手遅れである。

(通帳見て氣絶しないかなあ……や、通帳は無いか)

変人だが分類的には小市民であるリノは、遠い目でそう思つた。

「そうですね、ご主人様」

「……え、何？」

突然意氣消沈した様子で目を伏せたヴィヴィアンを見て、リノは
思わず身構えた。

「私……私、ご主人様のご命令もなく外へ出てしまい……今更なが
ら、申し訳『ざこ』ませんわ……」

「え、あ、うん……いいけど」

しかし言つ事は案外まともである。なんだ、とほつとしたリノだ
が

「ですから……ご主人様、お仕置きをつ！ お仕置きをしてくださいませつ！」

その言葉には流石に脱力してカップを取り落としかけたのであった。

なんとか宥めすかして、ヴィヴィアンを諦めさせ、夕方近くに宿に帰つた。

ひどく体力を消費した氣がする。昨日と同じベッドに体を投げ出して、ぽい、と靴を床に投げた。

部屋に一人でいると、何もする事が無くなる。

元の世界に居た頃は、日がな一日ゲームに熱中していた。学校から帰ればゲーム、夜中までそうして、朝起きてからも偶に顔を出して、学校に行く。

遅く寝て早く起きるのが生活スタイルだった。そして、それが苦にもならなかつた。

金曜の夜からは、殆ど寝ずにゲームに没頭していた。ネットゲ廃人、まさにそれなのかもしない。課金こそ学生ゆえに入より少なかつたが、掛けた時間たるや有数のものであるうと思つ。

読書だと、音楽鑑賞だと、興味は無いでもなかつたが、それはほぼ学校のみで終わつてしまつ、よつた希薄な興味。図書室で、音楽の時間で。それだけでよかつた。

体を動かすのは苦手で嫌い。勉強は、授業さえ聞けばそこそこ出来た。本当に、やる事など何も無いよつた気がしてくる。

娯楽のないこの部屋で、一体何をすればいいのだろうと、ぼんやり

り思ひ。

「せめて」

その先の言葉は無い。
ゲームを始める前は、何をしていただろう。自分には何があったのだろう。

(探検とか? ……あー)

よくよく考えてみると、現実から電腦世界に舞台が移つただけで、あまり変わっていない。

(要するに悪ガキだつた訳だな)

無茶ばかりして、興味があれば突っ込んで。他人などどうでもよく、自分本位に生きて。

そのストッパーに……なりきれていなかつたが、一応止める役が幼馴染だつた。

リノは暫くぼーっとした後、悩む自分がなんとなぐ恥ずかしく思えて、体を起こした。

「風呂……」

面倒臭そうに服をぽいぽいと脱ぎながら裸足でバスルームに歩いていく。

ドアを開けた時には全裸になつていた。
いくら何でも適當すぎるのが、幸いにも見ている者は誰も居なかつた。

風呂に入つてすつきりし、着替えて髪を乾かす。

生活系魔法のひとつ 热風を出す《ドライヤー》。何の用途があるんだと思っていたが、案外便利だ。タオルと併用しつつ手早く髪を乾かした。

辺境の魔女が割とホイホイ教えてくれる生活系の魔法。生きていながら是非とも礼を言いたいものだが、恐らく無理だ。

「はあ……」

どんなに適当に洗つても艶々と美しい青の髪。ブラシやらは持つていなかつたので、風呂場にあつたものを使つている。

化粧品もそれなりに揃つていて、細やかなサービスの行き届いた本当にいい宿だ。

とはいえリノはあまり化粧品には手を出していくない。元々あまり興味がないので、精々化粧水と乳液を使つたくらいだ。

この体は、文句無しに美しい。

顔立ちこそ面影があるし体つきはあまり変わらないが、艶々とした肌や髪が嬉しくもあり悲しくもある。自分の生まれ持つたものでもなければ、努力で得たものでもない。

持つているものだけ、自分の体を張つて手にいれた訳では無い。

だから、早く会いたい。

唯一対等である幼馴染と。

あるいは、他のプレイヤーと。

「相席してもいいかな？」

「よくない」

「あははは」

食事に行くと、昨日の男が現れた。返事を無視して向かいに座った男は、相変わらず胡散臭い雰囲気を撒き散らして微笑んでいる。

「耳が悪いのかな、君」

「良くないんだろう？ 駄目とは言つていなかないじやないか」

「駄目」

「遅いよ」

殴りたい。

パスタをぐるぐると巻きながらリノは食べるスピードを早める事にした。味わつて食べたいが、この男の前に居て平然としていられる訳が無い。

具体的に言つと手が出そつなので早めに去りたい。

「やうやう。これ、プレゼント」

す、と差し出されたのは白い封筒だった。

封蠅も何も無い、じく普通の封筒。元の世界にもありそつな有り触れた封筒だ。

しかし、

「……」

右下に小さく書かれた名前を見て、リノは迷わずそれを手に取つた。

開いた封筒から素つ氣無によつな便箋を取り出し、書かれている

文字の筆跡を見て唇の裏側を噛む。

そうしないと、もう笑ってしまいそうだった。

「嬉しそうだね」

「そう？」

リノは封筒に便箋を戻すと、今度はゆっくりと食事を再開した。これを持つて来てくれたのなら、許してやろう。
そんな寛大な気持ちになれるほど愉快だ。

「なるほどねえ。面白い関係だよ」

向かいに座る男がそう言つて笑つても、あまり怒りが湧かない。

リノはグレープフルーツのジュースが喉に染みるのを感じながら、今更な自己紹介をした。

「僕、リノっていうんだけど。……君は？」

「はは、ありがとう。僕はゼディーギス・ガーズ・レーベルント。ゼディでいいよ」

「そう。よろしく」

その名前に、周りで食事を取っていた人々が僅かにざわつき、ちらちらとこちらを見た。

有名人か、と思いつつリノは気にせずジュースを最後まで飲み干す。

「レオもだけど、本当に気にしないんだね」

「貴族か何かだろう？ 何でこんな所にいるのか知らないけどね。」

「ふつでもいいや」

「一応、伯爵家の長男だよ。放蕩息子なのさ」

「ふうん」

金茶の髪に、緑の目。それなりに整った高貴そうな顔。……それは兎も角、仕立てのいい服、何よりポケットに無造作に突っ込まれたハンカチに紋章らしきものがある。

見れば分かる、リノは呆れたように笑つた。

「……」
「名前」

「よく言われるよ」

口説かなくなれば、それなりにゼディーギスはいい話し相手だった。

知識は豊富だし、噂話も良く知っている。放蕩息子は放蕩息子なりにいい所がある。

その日の食事には満足でき、心地よい疲労に身を任せ、リノはぐつすり眠つた。

泣き女と遊び人（後書き）

好感度

見習い騎士と遊び人

理乃へ。

見慣れた字で始まつた手紙。いつになく丁寧な筆跡である。

ゼディーギスから何を聞いたのかは知らないけど、いちやついてない。まとわりつかれてるだけだから、信じてくれ。いきなり城に居て、やばいと思ったら何故かモンスターが居て、倒したらみこ（漢字が思い出せない）とかいう奴に感謝されて、城を出ようとしたら絡まれてる奴が居て、助けたら感謝されて、城を出たのに何故か付いてきて、あとアイテムの出し方が分からなくて金が出せないから稼ごうとしたら冒険者の女と依頼が被つて、一緒に行つたらなんかピンチを救つちゃつて絡まれて付いてこられた。

なんかこいつら理乃を探すのを阻止してくる。本気で何考えてるのかわからん。この手紙も奴らから隠れて書いてるから、届くかどうか怪しいけど、ゼディーギスに頼んだから多分大丈夫だ。あいつあれでも伯しゃく（漢字が書けない）家の跡取りだし。

会う場所は多分町になると思う。なんとか振り切つて向かうから、できたら明日

慣れない筆記具を使ったからなのか、所々文字が掠れた手紙を読み終える。

「……とつあえず、漢字の勉強をさせよ。」

数えた所、誤字が12箇所あった。

リノはそう誓いつつ、手紙を封筒に戻すのであった。

翌日、身支度を整えて再び町に出た。

今度は商店街を見ていく。食べ物類を買うと店主がやたらオマケしてくれるの、姿がいいのは得だな、と思いつつ再びヴィックルの居る駐屯所に向かう。

「俺にもくれよ」

「チョコ付いてるから駄目だよ。猫でしょ」

「猫じゃねえし！」

今回は威嚇のためにペット 豹騎士(パンサーナイフ)のバルログを連れてきているので、絡まれる事もない。ちなみに名前だが、豹^{ヒョー}＝……

という分かる人しか分からぬ微妙なネタである。

豹の頭に屈強な肉体を持つ彼は、獣人の聖地の番人をやっていた。レベルは620で、実は神官に属する神官騎士(ブリストルセイド)だ。

見た目はどう頑張っても戦好きの傭兵か何かにしか見えないが。

「つて言うか遠慮が無いよね。ペットのくせに」

「何でだ？ 主の食べかけだぞ。狙うだろ、普通」

「うあああ嫌だペットってみんなこうなの！？ 変態なの！？」

「主に対する敬愛が千年掛けて醸酵しただけだ！」

「それは醸酵じゃなくて腐敗だ！」

ちなみに醸酵と腐敗の仕組みは同じで、人にとって有用な場合のみ醸酵と呼ぶ。

「で、そいつは何だ」

「ボディーガード」

「……まあ、良いんだが」

駐屯所にたどり着いたリノは、非常に嫌そうな顔で椅子に座り、脇に跪いた男の顎の下を擦るように撫でていた。本気で嫌そうな顔である。

「あー……何で撫でてるんだ」

「しつこいから」

「ここまでもちやんと護衛したからな。褒美だろ?」

「その気持ちは分からん訳ではないんだが……」

「分かるなあああつ! 大の男が2人して撫でられる事を肯定的に見るなつ!…」

ナメクジを見るような目 いや、リノはナメクジも平氣で触れる人種なので、ストレートに言えば変質者を見るような目で2人を交互に見る。

ヴィックルは「解せぬ」とでも言いたげな顔で向かいに座り、バルログはむしろ恍惚とした顔になる。リノの表情が更に引き攣った。

「普通の生物が何故ペツトになつただけでこんな事になるの?」

「元々普通じゃなかつたがな。更正させてくれた恩だらうと思うが」

「まあ、刷り込み的なあれじやね? そういえばヒヨコの踊り食いつていいよな、生まれる前に卵」と食べるやつ

「ああ……分かる」

「……黙れ人でなしども!」

本来の意味で言えばこの場全員が元々人間ではないが。
そう叫んで頭を抱えるリノを見て、バルログは名残惜しげに床に

どっしゃりと座った。

「で、何の用だ？ 手紙は届いたか」

「届いたよ。今日の午後に合流する予定なんだけど」

「それは良かつた」

「……まあ、報告ね。手紙届けてもらつたし、これ」

アイテムボックスから出した箱を手渡すと、ヴィックルは意外そ
うな顔で礼を言つた。

「メロンか。ありがと」

「まあ、お礼にね」

「主からプレゼントか！？ ずるいぞ」

「黙れ。……じゃ、そろそろ行こうかな。午後まで暇を潰さないと」

「いや、待つてくれ」

立ち上がるリノを呼び止め、ヴィックルは少し顎に手を当てて考
え込む。

「暇なら、訓練を手伝ってくれないか？」

そして思いついたようにそう言つた。

駐屯所の裏手にある訓練用の広場に、びつ見ても戦闘用ではないステッキを手にしたリノが立っていた。

上は動き易さを優先した簡素なチュニックに軽そうなレザーアーマーで、下は革のショートパンツ。由て脚はむき出しで、靴は頑丈そうなショートブーツである。

「来れば？」

「あ、はい……」

向かいに立つているのは、騎士見習いの少年だ。リノと同じくらいの背丈だが、体はがっしりとしている。彼は躊躇いながら木剣を握り締め、駆け出す。

「……」

何故こうなった、とリノは溜息を吐きながらステッキを回した。

数分前、「どうせ暇だからこよ」と手伝いを了承したのが運のぬき。

（まあ、まさか試合とかさせられる訳じゃないだろうし）

と軽く思っていたのだが、思い切り裏切られた形になる。狼の顔なので分かり辛いが、おそらくいい笑顔を浮かべたヴィックルに「頑張れ」と送り出され、バルログには「足ほつせー」といらない感想を言われた。

「対人戦はやなんだけど……ねえ？」

ステッキを回しただけで剣を弾き飛ばされ、ついでに蹴られて転がされ、背中を踏まれている少年は「へ……？」と気の抜けた声を上げた。

「ほら、次だ次。とつとと出る」

「は、はいつ」

訳も分からぬまま剣を拾い、少年は頭を下げる戻つていった。

お世辞にも肉弾戦が得意とは言えないステータスを持つ遊び人だが、数少ない近接武器の一つがこのステッキである。

紳士や老人が持つようなタイプの杖だが、立派な武器である。ちなみにリノが今持っている杖は白い杖で、上の部分が傘の持ち手のようにつくるじと曲がっていた。

「行きますっ」

「おいでー」

リノはステッキをくるじと回し、次の相手を迎撃つた。

今度は油断もせず、しっかりと構えて飛び込んでくる。リノは地面にステッキを立てるように突いて

「くつ！？」

地を蹴つたかと思うとステッキの持ち手を蹴り、そのまま飛び上がる一回転して相手の背後に回る。

「はい残念」

そして背中を思い切り蹴りつけた。

少年は未だ立っていたステッキに鳩尾を直撃されて呻きながら倒れる。観戦していた男達は痛そうにそれを見ていた。

いや、痛そうに、ではない。

「こんなに強いなんて聞いてねーよ…」

「うわあああああうつそだろ……」

「帰つてきてくれ俺の銅貨3枚いいい！」

賭けに負けて悔しがっていた。

よく見れば一人だけ腕を振り上げて「よっしゃあああもっとやれ！」と叫んでいる。先日リノを出迎えた騎士だった。

貴族らしき者達はやせ我慢して「これくらいはした金だ」と言っているが、それを本気に取るような者も居ないらしく、雰囲気は明るかつた。

「次！」

ヴィックルの声と共に、呻いていた少年が戻つていき、次の相手が駆けてくる。

腹いせとばかりに派手に飛び回り、貴族平民入り混じった20人程の見習いを全員倒したリノは例の男に「お前いい奴だな！」と何故か感謝された。

これでリノの出番は終わりだ。

「で、俺とあんたが戦うのか」

「……何でこんな事になつたんだかな」

そして今、訓練場の中心に立つのは2人の獣人。

周りとリノに乗せられ、ヴィックルとバルログの試合が始まった。

見習い騎士と遊び人（後書き）

バルログはストリートファイター的な意味

補足：ジョブやクラスは人型モンスターには設定してある事が多い
ただしモンスターだと特有能力で戦うので、あまりスキルは使わない。

ヴィックルとバルログはそれぞれ**バスター**騎士と**クルセイド**神官騎士である。同じ**クルセイド**騎士と付く職はあるが、**バスター**騎士はやや攻撃寄りの特性を持ち、神官騎士は回復スキルを扱えるという特徴がある。

「ヴィックル！ 頑張れ！」

「俺は？ 主ー！ 俺は！？」

「そこでボケる」

「マジで！？」

レベル的には60ほど開きがあるが、双方レベルを200に抑制するアイテムを付けている。大きなスキルはMP不足で使用不能になるが、一応は互角となる。

しかし、防御力が高く攻撃にも長けたヴィックルと、彼に劣る防御力を回復力で補っているバルログ。その上**パンサー**騎士は**ワーキャット**猫人族に近い種であるため、敏捷に限つてはヴィックルに勝つてはいるものの、やはり攻撃力には欠ける。

(まあ、ヴィックルが優勢かな)

あくまでゲーム知識に従つての分析だが、リノはそう思った。

試合が始まり、まず動いたのはバルログだった。

正面から真っ直ぐに斬りかかる。ヴィックルはそれを盾で受け、攻撃に転じようと剣を突き出す。しかしバルログは足を跳ね上げ、突き刺すように迫っていたヴィックルの剣を下から蹴つて、もう片方の足で後ろに跳躍した。

「……いや、あれ木剣じゃなきゃ使えない手だよね」

リノが呆れたように言った。

バルログは「何でもありだぜ！」と滅茶苦茶な事を叫び、再び迫って斜めに切り下ろす。

それを再び盾で受け止め、そのまま力任せに押してバルログを跳ね飛ばす。

リノからすれば両方筋肉の塊に見えるが、やはりヴィックルの方が重量がある。

「力つえー！」

そう言ってバルログは嬉しげに唸り、ヴィックルの持つた剣より大振りな剣を構えた。

瞬間、木で出来ているはずの剣が陽光を跳ね返したように煌く。

「強化か！」

ヴィックルの声と共に、ガキンと音がした。

木で出来た盾がぱっくりと割れて落ちる。ヴィックルは舌打ちをし、手元に残った片割れを思い切りバルログに投げつける。こいつらスポーツやらせたらラフプレー連発しそうだ、とリノは

□元を引き攣らせる。

「切れた！？ 投げた！？」

「はんちょおおお！ 騎士道騎士道！」

「……班長つて？」

「ヴィックルがここにトップだよ」

「……いや、“班”なんだ。班長なんだ」

「正しくは“小隊”だけどな、通称だ通称。つーか俺、ヴィックルの奴め、賭けてやつてんだから負けたら承知しな そこだ殴り倒せええええ！」

叫んだのは先程ぼろ儲けした男である。

一応軍のような組織だというのに賭け事が横行していく良いのだろうつか。

リノは心底この国が心配になつたが、とりあえず試合に集中する。

振るう度にきらりと輝く剣。見て分かるように、強化スキル剣の舞？が掛けられていた。？から？まであるのだが、レベル上の問題で今使えるのは？のみである。

クラスに依存しない武器技能ウェポンスキルである剣の舞は、ごく単純に武器攻撃力を上げるだけのスキルで、？であればその上昇量は武器攻撃力の10%。

10%というのは案外大きいもので、更に強化スキルに彼自身がモンスターとして持つ技能を重ねて使用しているようだ。これは筋力と敏捷をそれぞれ上げている。

「やっぱ、押されてね？」

「うーん。ヴィックルもスキルを使えばいいんだろうけど

「ああ、班長クラス持ちだもんなー。いいよなあ」

「……ていうか、みんな剣ばっか使うから駄目なんだと思つよ」「そーか？」

クラスが習得できないとはい、実はジョブのみの状態もある程度武器技能は習得できる。

分析で見てみると、男の名はロレンシオ・バラハ。レベルは52と、以前見た無法者たちよりずっと鍛えられている。ジョブは遊び人であった。

「……杖とかオススメ」

「杖？ 嬢ちゃんが使ってたような？」

「そうそう。あとカードとかサイコロとかを弄ってるといい事があるかもしれない」

「ほー。俺ポーカー強いんだぜ」

「僕も強いよ？」

ちなみに現実でも強い。

「うおおお折れたああああ！」

視線を戻すと、アクション映画ばりに転がつて攻撃を回避するバルログが見えた。

今度は彼の剣が無い。見れば2本に切れた状態で遠くに転がっていた。

「……どうなったの？」

「班長もスキル使つてー、鍔迫り合いになつたらポキッと折れた」

ロレンシオの向こう側に居た見知らぬ騎士がのんびりと言つ。リノは心底呆れたような顔で溜息を吐いた。

「ポキッ」と

「まあ、たまに剣折れるよな。俺のだけ」

「そして給料から天引きされてるよな」

世知辛し

思わず同情の目を向けると、試合の方から大きな音が聞こえる。見ればバルログが吹っ飛んで壁に激突していた。

「ちなみに今のは両方剣が無くなつて取つ組み合いになつた結果、投げ飛ばされたのな」

そして 視線の向こうで、平然とバルログが立ち上がっていた。

「おい！？」

五ハニ腰ニ風ハた本物の剣を抜ハてハた。

「あーあ」

リノはそう言って、ひとまず2本の瓶を取り出した。
が怪我をしてもいよいよ、一応回復の手は用意しておぐ。
あとは、好きに戦えばいい。万一死んでも蘇生できる。ＳＰの問題で、そのままなら二度が限度だが。

人同士の戦い。

それはリノにとって、画面の向こうの話だった。けれど今は違う。いつ曝されるか分からぬ以上、慣れておく事が望ましい。

(だからって高みの見物つていうのも趣味悪いけど)

一瞬自嘲するような笑みを浮かべるが、それはすぐに消えた。

試合の結果は、バルログの粘り勝ちであった。

一応かなり時間を潰せたので、リノは一度宿に戻る事にした。ヴィックルやロレンシオ達に別れを告げ、バルログを連れて宿の方に向かって歩いていく。

「おや」

その途中、何か人ごみが出来ているのを発見した。

やけに女性ばかりのような気がするが、中心部は見えない。

元々欧米系の多いこの世界であるが、背の高い様々な種族との混血によつて平均身長は鰐上りに上昇している。千年前なら兎も角、今このこの世界で16歳の160センチはそう高くもないし、むしろ低めだ。

集まっている者達には、20代前後の若い女性が多い。子供はもう多くないので、必然的に人ごみの中をのぞく事は出来なかつた。

「主、チビだもんな」

「……よし、突撃しておいで。そのまま帰つてくるな」

「何で!?

かなり変わつたとはいゝ、日本人の顔立ちの残るリノは幼く見られるし、背からしても精々13歳くらいといった認識をされる。必死に伸ばしてこの身長になつた彼女としてはかなり不本意だ。

2メートル前後の身長を持つヴィックルやバルログ、更に大柄な某一家には理解できない悩みではあるが。

そう思いつつ通り過ぎようとすると、人ごみが割れた。
リノ達の方向に。

「お？」
「……んん？」

現れたのは、金茶の髪に緑の目をした男である。

「ゼディじゃないか」

片手を挙げて人ごみに「じゃ あね」と愛想良く言いつつ近寄ってきたのは、ゼディーギス・ガーズ・レーベルント。
リノからすれば胡散臭い笑みを浮かべている彼は、ちらりとバルログに視線を送った。

「外で会つのは初めてだけど、護衛連れ?
「そんな感じだよ」
「先日は絡まれたと聞いたけど」
「……どこからそんな情報?」

ゼディーギスはにこりと微笑んだ。リノもまた、微笑みを返す。
一見和やかな風景だが、背後に竜と虎が見えたと後にバルログは語つた。

「これから宿に帰るのかい?」
「まあね。午後から約束があるから」
「そう。ランチでも一緒にどうかと思つたんだけど」

「別に来てもいいよ？」宿泊客以外は予約がいるらしいからバル口
グは駄目だけど

「え？」

(といふか何で普通と一緒に食べるつもりなの!?)

言つた覚えもない!

愕然として膝から崩れるバルクの背中を蹴り、「買し食いはしていいから！」と叱咤しつつ、リノは遠い目をするのであった。

飛び蹴りする遊び人

リノが宿泊している宿、“リンダ・ティンダ”に1人の青年と、女性たちが訪れた。

ちなみにリンダ・ティンダとは創業者の名前である。それなりの歴史と地味な人気を誇る小奇麗な宿だ。

「えーと、食事の予約取ってたんですけど……」

少し居心地悪そうに、ちらちらと左右と後ろに立つ女性たちを見る。

文句あるの、といったふうに彼女たちは青年を見返した。

「どういは……」

「あ、レオです」

白髪混じりの初老の男性。この受付に立ち続けて50年ほどになる彼は、実を言うと宿の主人でもある。夜になれば食堂はバーに変わり、そこでバーテンもしている。

人間観察が趣味の彼は、デイルク・ティンダといった。

「少々お待ちください　　おや、予約は1名様となっていますね」

デイルクが予約を確認して問うと、女性たちが青年を睨み付けて服を引っ張る。

おやおや、とデイルクは薄く微笑んだまま興味深げな目で彼らを見つづつ、『7号室・リノ様より』といつ手元の文字をなぞった。

「ほりやつぱりつ！」

「レオ様っ、あんなに言いましたのにっ！…！」

「あーあーあー聞こえない全然聞こえない……」

もつやだ、と諦めた調子で首を振る。左右から腕を引っ張られ、金髪碧眼の美青年 レオは、溜息を吐いた。

長身で、あまりゴシすぎないが筋肉質の体躯。物語の英雄のようになつた顔立ちは、僅かに異国の雰囲気を感じさせる。そしてビリとなくヘタレ臭が漂うのは気のせいと思いたい。

「待ち合わせのお相手は外出中ですが、どうなさいますか？」

「あー、じゃあここで待つて」

「帰るわよ。まだ間に合つわ」

「いや、何でだよ。何にだよ」

「大体、どうして居るかも分からない幼馴染をお探しになるのですか！」

「噂聞いたからだつて つーか手紙來たし、今外出中つづつただらう！？」

もう泣きたいとばかりに頭を抱える。生まれてこの方 少し幼馴染が離れるだけでこれなのだから、できれば離れたくない。もちろんそれだけの理由で一緒に居る訳ではないが、今はそれが頭を占めていた。防波堤扱いである。

(ちくしょ「つ、恋する乙女死滅しろー。）

全国の男女は怒つていい。

そしてその瞬間、レオは背後から強烈な蹴りを喰らつてよろめいた。

いわゆる天罰、ではない。

「きやあつ！？」

「れ、レオ様つ」

心配しつつも蹴りを放つた人物を睨み付けて怒鳴る女性たちを、まるつと無視してレオは恐る恐る振り向く。

綺麗に着地して歩み寄り、その人物はレオの胸元を引っ掴んで引き寄せる。

そして

「レオのくせに何様だつ、ディカプリオに謝れ！」

物凄く理不尽な台詞と共に、小気味良い音を立てて音速のビンタが入つた。

小柄な少女 リノは、ちょっと嬉しげだが怒つている、という奇妙な表情でレオを睨み付けている。レオは呆然としていたが、すぐには笑顔を浮かべた。

「リノ、会いたかつたつ」

ぶんぶんと振られる尻尾が見えるかのような懐っこい笑みである。向けられた事のない満面の笑みを見て、周囲の女性が射殺さんばかりにリノを睨み付けた。

リノは溜息を吐き、言い聞かせるように言つ。

「だからそれが誤解を招くつて言つていいだろ？」「

「だつてもう俺本当に胃が千切れそ……」「

「そのまま千切れればいいつ、あと触るな！」「

泣き言を言いつつ無意識に伸びた腕を払い、鳩尾に拳を叩き込む。まるで流れ作業のような滑らかな動きであった。

「そうだぞつ、主に触るな変態つ！」

「お前が言つなあつ」

そして背後からにじり寄つた豹騎士パンサー・ナイトを蹴り付ける。思い切り急所を蹴られて悶絶した彼を見て、思わず後ろから眺めていたゼディイーギスが呻いた。

「ちょっと、どうこいつつもり！？」

「何が？」

「いきなり蹴り入れるなんてつ、何考えてんのよ！ レオはあんたを探してたのにっ」

自分たちで妨害していた事は完璧に棚に上げ、冒険者風の女性は怒り心頭で詰め寄ろうとする。リノは平然と、むしろ自分から詰め寄つてじろりと下から上目遣いに睨む。

得体の知れない迫力に下がろうとすると、腕をぐつと掴まれた。

「蹴り入れたのが、酷いつて？ 16歳に纏わりついて、見知らぬ土地で唯一の知り合いに会おうとしてるガキを妨害する方がよっぽどアレだよね」

「なつ」

「酷いなー、心細かつたー超寂しかったー」

とてもない棒読みで言いながらレオに抱きつぶ。抱き付かれるのは嫌がっても、逆は良いらしい。

「俺も寂しつ」「というか、大人のくせに名乗りもしないで初っ端から怒鳴りつけてくるとか、どうかと思うよね!」

3人の女性はぐっと口を噤んだ。貴族でも、冒険者でも、神職でも、全くの他人に怒鳴りつけるのは望ましくない。ましてや、名乗らないし、他人がレオとリノの事情に口出しするのも可笑しい。言葉を遮られたレオは、飼い主に怒られた大型犬のようにしゅんとしている。

「……ジーナ・カロッタよ。冒険者」

冒険者風の、ショートカットの茶髪の女性が言った。田はオレンジ色で、いかにも姉御肌な雰囲気である。

ジーナ・カロッタと言えば、凄腕の女性冒険者として大陸全土に知れ渡る有名人である。平民出の彼女だが、ルーンブレイド魔法剣士のクラス持ちでもある。

「ジユベレ公爵家長女、アデライド・シュアリナ・ジユベレですわ」

腰まで伸びたピンクの髪に同色の瞳。ジユベレという苗字には僅かに覚えがあるので、かなり古い家系だらう、とリノは思った。

ジユベレ家の開祖と言われるラジエイト・ジユベレがリノの知るジユベレの者だ。1000年前に生きた彼は別に貴族ではなく、冒険者だった。唐突にプレイヤーがいなくなつた世界で冒険者の需要は鰐上りに上昇し、じきく紛れに国に召抱えられて爵位も貰い、今に至る。

その血筋のお陰か、ジュベレには良くクラス持ちが生まれる。この国では王家に次いで力がある家とも言えた。

「レマリー・セラーテ・レイステイアです」

艶やかな黒髪に、黒い目、巫女服。職業が大変分かり易い容姿をしていた。

レイステイアとは神に仕える者が名乗る姓だ。神殿に正式に所属する者は例外なくこの姓を名乗り、元の身分を捨てる……事になっている。何事にも例外はあり、そして貴族は例外を通し易いものだ。更にセラーテとは神と対話できる唯一の立場、巫女だけに与えられる名前だ。名前ある名前を、あまり無い胸を張つて自慢げに言つ。

「ふうん」

と、有名人3人の自己紹介を聞いて洩らした感想は以上であった。リノからすれば全部どうでもいい。知らないものは知らない。「じゃ、行こ」とレオの手を掴んで食堂に入つていき、それをゼーディーギスとバルログが追つた。

「へ？」
「え？」
「は？」

彼女たちにとつて、名を名乗つてこれほど無反応だった事は初めてだった。
肩透かしを喰らい、しばし呆然とした後に追いかけようとしてそれをディルクが制した。

「お待ちくださいませ。大変申し訳ございませんが、当宿屋ではご

宿泊のお客様以外の食堂の利用は「」予約が必要になつております

そしてその言葉に、ますます3人は啞然とした。特にアーテラードとレマリーは、まさか自分を止める人間など居るとも思つていなかつた。昔より権力が弱いとはいえ、一応公爵家の娘と巫女なのである。

「そして予約は現在1週間待ちとなつております」

更に言うとこの宿は繁盛していた。ちょっとと背伸びすれば貴族並の美味しい食事が取れるので、食堂はいつでも大繁盛なのである。

「またのお越しをお待ちしております」

笑顔で言いながら、暗に「お引き取りください」と田で言つ。

そもそも利用層に入らない貴族や神職の2人に媚を売つても仕方ない。ゼディーギスは数少ない例外だ。更に冒険者は大抵行き着けの宿があるので除外する。

部屋の種類を問わず代金は1人いくらで決まるし、身分は関係ない。別段貴族の客が来なくともやつていけるのである。今の時代、貴族と平民の差など殆ど無く、平民相手と同じ態度を取つたとて罰せられはしない。そもそも普段顔を合わせないので。

だから、利用してくれる見込みのない者よりは、現行で利用している者を優先する。

10日滞在3食付のリノヤ、一部屋を年中借り切つているゼディーギスという上客の機嫌を害するなら、貴族も巫女も追い返すのがディルク・ティンダという男である。

(面白いお客様ですねえ。これは見守らなければ)

それに、もう1人宿泊客が増えそうな気がする。

ディルクはレオがこのまま宿泊してくれる事を期待しつつ、残り2人を叱咤して出ていくジーナの背中を見送った。

「あんたたち、今日の所は帰るわよっ、不本意だけど…」
「なっ、何であなたが仕切ってるんですのっ…？」

「そうです、偉そうに…」

「うるさいっ！ 普段回りに何もかもやらせてる小娘どもが偉ぶるなっ！ 言つとくけど、権力で平民の予約に割り込むつもりなら、あたしは殴つてでも家に叩き返すわよ。そもそもあたしの護衛があつて外出許可出されてんでしょう」

「う…」

やはり姉御肌だ。

そう思いつつ、ディルクは万年筆をぐるぐると回して満足げに微笑む。

今月も、どうやら黒字だ。

ランチタイムと遊び人

円形のテーブルに3人で座る。
『ごく自然にリノの脇、の床に座ったバルログについては誰も突っ込まない。

「えーと、リノ……」
「何?」

レオはちらりとテーブルから突き出た頭を見た。
突つ込んだら負けの仁義無き戦いが繰り広げられ、瀟洒なテーブルの上に鋭いような微妙な空気が漂っている。

「何かその、気になる事は……」
「無いけど。……ゼディは?」
「僕は無いなあ」

三人は胡散臭い、またはぎこちない笑みを向け合った。
その時丁度、料理が運ばれてくる。本日のメニューは魚介類がメインらしい。

(こんなところで、どうやって魚獲るんだろ)

レイスタイルのメインの舞台となる大陸は、レイス・テーアという。

ジャガイモのような形で中央に大河があり、王都は丁度川と海の中間にあたりに位置する。

水を得ることは難しくはないが、魚はどうするのだろうか。浮かんだ疑問を知つてか知らずか、給仕の青年がにこやかに説明した。

「本日は空魚フラウオや空貝フラガイをメインにしたメニューになつております」

レオが首を傾げる。しかしリノは納得したように微笑み、なるほど、と呟いた。

空魚や空貝は、水中ではなく空中で生きる魚介類モンスターである。

空魚は地上3~5メートルを泳いでおり、餌を付けた細い棒を突き上げて釣る。空貝は屋根や崖にくつ付いていることが多い。

深海魚とは逆に高空魚といつものがいて、遙か空の上に生息しているたりもする。

ちなみに未確認生物のスカイフィッシュとは違つ。

「あ、あれか！ フライングカジキマグロ事件」

「……まだ言つ？ それ」

フライングカジキマグロ事件は、空魚や空貝が実装された時に起きた事件である。

当時、空釣り用の竿だけ実装が遅れており、闇雲に空に向かって攻撃した命知らずが居た。

リノである。

攻撃されたカジキマグロは落下し、通りすがりのプレイヤーの脳天に見事突き刺さった。

しかもそのプレイヤーがイロハ・ニホヘトだ。当時既に魔術師マジシャンにあるまじきHPの高さを誇っていたため、そのまま平然と動いていた。

脳天にカジキマグロを突き刺したままリノを追いかけるイロハ。爆笑しながら攻撃され、死の恐怖を味わった。

追いかけっこはレオを巻き込み、当時まだ【アルテマ】は未結成であつたものの、現メンバーの一部まで巻き込んだ。その結果、イロハ対数人の至高人ハイランダーのバトルは前者の勝利に終わった。恐ろしいことに。

「ほんとトラウマなんだけど」

「あれがきっかけだよな。対師匠同盟組もうぜつて」

「そうそう。わざわざ至高人ハイランダー集めてね」

阿呆らしいことに、それが【アルテマ】結成の理由だ。他にも、「全員違うジョブの八人組ってなんとなくかつこいい」といった感じの理由もある。何天王だと何騎だと何勇士だと、そういうものに憧れていたのだろう。

だから、ほぼ全員がギルドに属していなかつた八人はあつさり纏まつたのだ。

「結局8人でも負けたけど。ありえない」

「マジでありえないよな」

「……レオみたいな人が8人で勝てないって、想像付かないね」

何をやらかしたんだ、トリノが軽くレオを睨みつける。

彼女もあまり人の事を言えないのだが。

昼食だからか、食事はやや軽めのメニューだった。
空で泳ぐ魚だといつても、味は海のものとそう変わらない。サン
ドウイッチに挟まつたスマートサーモンやツナ、クラムチャウダー
に入つているアサリ。

リノは魚介類に好き嫌いはないので、喜んで食べている。

「リノ……」

「アサリね」

「うん」

むしろ食べられないのはレオの方であった。

魚はいいが、アサリが苦手なのである。シジミやハマグリは喜ぶ
というのに、何故かアサリだけは食べられない。アレルギーではな
いが、兎に角嫌なのだ。

レオは申し訳無さそうな顔でアサリをリノの皿に移していく。
一つとして見逃すことなく。

「…………」

横でゼディーギスが笑いを堪えている。

「なんだよ」

「ゼディ、レオはアサリとホワイトチョコと黄色いパプリカだけは
死んでも食べたくない、シジミと普通のチョコと赤いパプリカは
平気なんだ」

「意味つ、が、わからな……いー」

「お前もつ笑つてんだろー、なあ！？」

「よいよ堪えきれずに笑い声を洩らすゼティに恨みがましい目を向けつつ、アサリを移していく。大分アサリが増量されたスープを、リノは文句も言わずに飲む。

「僕は酢豚のパイナップルだけは無理。あとキムチが嫌いだなあ。キムチごはんは良し」

「『めん、ほんっど、君たちって……』」

ツボに入つたらしく、その先に言葉は続かなかつた。

「それにしても、ゼティが居るとあんまり下手な事言えないね」「何で？」

「胡散臭い。超胡散臭い。何か密偵臭い」

「やだなあ、照れるよ」

「褒めてねーだろ」

かなり綱渡りなやり取りが頻発したが、一応和やかにランチタイムは終了した。

ゼティーギスは用事があるから、と去つていく。にこやかに手を振る男を見送つて、リノとレオは同時に溜息を吐いた。

「疲れるな、あいつといふと」

「だよね……」

顔を見合わせて、どちらからともなく口元を緩める。

ともかくにも、再会できて安心できたようであつた。

ディルクに「2人部屋も空いておりますが」と満面の笑みで言われたりしつつ部屋を取り（もちろん1人部屋である）、ひとまずレ

オの部屋に集まる。

ちなみにバルログはアイテムボックスから出した骨付き肉を『え
て送還した。

「 で、どこまで分かつてる?」

ベッドにじろんと転がって、視線だけレオに向けて言つ。
男の部屋であまりに無防備すぎるが、2人にとっては日常の範疇
なので今更である。

「 こじがアーティアレストだとは分かつてる」

「 それだけ?」

「 そんだけ」

「よくその状態で普通にしてられるよね」

呆れたような声に、レオはウインドウを弄りながらあっけらかん
と返した。

「 リノが知ってると思つて」

「」

居るかも分からぬのに頼るな、と突っ込もうとしたものの人の
事を言えないでの口を噤む。

代わりに、深い溜息を吐く。

「 じゃあ、知ってる事話すけど」

「 」

そして、現状の説明を始めるのであった。

夕方、ゼディイーギスはほとんど皿座のようになつている宿の一室で、ぐるぐると万年筆を回しながら書き終えた報告書を読み返していた。

「付け入る隙も無いほど仲良しだからなあ。困った困った

風呂から上がつたばかりらしく、金茶色の髪はまだ湿つている。ランプに照らされて浮かぶ容貌は、昼間よりも遙かに整つて見えた。

それもそのはず、昼間の彼は魅力をかなり下げている。ステータス的な意味で。

でなければ彼の役職として致命的な程に目立つからだった。

「……これ外したら、結構いけるんじゃない？」

王家に伝わるアイテム、醜姫の指輪。

……ちなみに、ただのマイナス補正の付いたゴールドリングである。リノたちならNPCに投売りする程度の品だが、現代では王家伝来の秘宝扱いである。

その効果は、魅力ステータス -30%だ。普通の人間なら元々の値が小さいからそう変化することもないが、ゼディイーギスの場合は雰囲気どころか顔までがらりと変わる。

それでもちやほやされるのだから、元の容姿が優れているのだろう。

髪の水分を拭うのもそこそこ、紙を小さく折りたたんでいく。
そして窓枠を軽く叩くと、小鳥が一匹どこからか現れる。

「父上。 ああ、勿論本物の方にね」

『カシコマコマシタ』

体は白く、頭は緑色の小鳥。これもまた王家に伝わるもので、『メーラーバード伝書鳥』トモヅと叫う。見た田こそはリアルな小鳥だが、魔力で動く細工品だ。

暗くなり始めた空に羽ばたいていく小鳥を見送つてから、ぼすんとベッドに沈む。

一体明日はどんな面白い事をやらかしてくれるのだろうか。
ここ最近の報告書が観察日記と化してきた事は否定できない。ゼディーギスは思い出し笑いをしながら、ランプを消した。

「よし」

一通りアイテムボックスを整理し、実用的な生活に必要そうなアイテムと、そうでないものを分け終わる。

部屋が暗くなつていく事にも気づかずに作業とリノの話に集中していたレオは、ふと声が聞こえなくなつてゐる事に気づいた。

「……リノ？」

横を見ると、ベッドでリノが寝入つてゐる。

時刻、午前2時。

以前であれば平氣で起きていた時間帯だが、やはり疲れが溜まるのだろう。

（……まーた何か首突つ込んでたし）

なんだかんだで話はしつかり聞いてゐる。

異世界に場を移そうが、やはりリノはリノだな、と呆れ半分安心半分の気持ちである。

昔から、レオが女性に目を付けられるのと同じ程にトラブルに愛

される性質だ。お互にそういう星に生まれたものだと諦めていた。

それでも、助け合えばそれなりに回避できるし、解決できる。だから離れて生活すれば数日とせずに疲労が溜まるのは自明の理だった。

そもそも他人と居るだけで面倒くさいこと感じるレオにとって、この数日は本当に拷問だった。

人間は誰しも違う。合わないピースは合わないもので、それを曲げられるかどうかは人によりけりだが、レオには無理だ。苦痛で仕方ない。

だから再会の喜びはそれはもう尋常ではなかつた。砂漠でオアシスを見つけた心境である。

何時もなら割とぼんやりしているレオがそういう時だけ尻尾を振るので、周囲はますます誤解する。リノは周囲からのそういう目を死ぬほど嫌っていた。

(……、どうするかな)

リノに説明をしてもらひついている間、言おつか言つまいが迷つている事項があった。

重要だが、言わなくても困ることはない事実。

いつかは言わなければいけないが、タイミングに困る。

(めんどくせ……)

そう思いながら、ふあ、と口を開けて欠伸をする。

ベッドにぼすんと座り、整理し終えたアイテムボックスタブを操作して楽そうな服に着替え、「じろんと転がる。

自然に片側を開けて眠っているのは、ベビーべッドに纏めて転がされていた頃からの癖だ。

リノの頭を持ち上げて、ひょいと片腕を差し込む。するとともども

ぞと動いてごく自然に定位位置に移動し、猫でも抱いて眠つてゐるような体勢になつた。

周りが言つような関係に無いことは確かだが、とにかく2人は隣り合つたパズルのピースのように気が合つ。元々一枚しかピースが無かつたと言つた方が正しいかもしない。

隣り合うぬくもりは、目を閉じてしまえばもう本来の彼女と何ら変わりないようと思えた。けれど脳裏に焼きつくような光景は、紛れも無く真実で。

いざそれをお話さなければいけないと氣が滅入るが、やはり彼も疲れていたのだろうか、すぐに意識は沈んでいった。

翌朝、六時きつかりにリノが目を覚ましてもぞもぞとベッドを抜け出して部屋に戻ったのをぼんやり確認して、再び起こされる七時半までレオは惰眠を貪つた。

「ぐえ

世の幼馴染達がはたしてそうしているかは不明だが、リノは躊躇いなく仰向けになつているレオの腹の上に正座で飛び乗つた。

以前より硬いとも柔いとも思えない腹筋だが、元の体と違つて飛び乗つた程度ではびくともしない。それを少しつまらなく思いつつ、ベッドの脇にどいたリノはびしりと命令した。

「腹筋腕立てスクワット50ずつ」

「うーーー……」

足を曲げて寝転がると、その足の上に座つて脛を背負れ代わりにする。

首を膝に預ければ、体を起こしたレオと田代が合つた。

「……うわ無駄に美形ー」

「お前も無駄に美少女だな」

無駄口を叩きながらでも、腹筋50回はさほどきつこものではない。以前より体力が上がっているのか、少しも疲れを感じることが無かつた。

腕立て伏せの際も、容赦なく背中に胡坐を搔いて体重を掛けてくるにも関わらず、あまり負担だと感じなくなつていて。

「女が胡坐つてのはどうなんだろうな」

「どうなんだと言つたら、未婚女性が平然と男の背中に座つたりしてゐるのもどうだらつ」

「俺は保護者だから良し」

「何言つてるんだ、僕が保護者だらフ」

ぴたりと動きが止まる。

「いやいやいや」

「はあ？ あ、あと7回」

「お前が俺の保護者？ いや、無いだろ。見た目からして、無い」

「僕の方が5日分年上」

不毛な言い争いをしながらトレーニングを終えて、服を着替える。アイテムボックスで指定すれば手間が掛からないので、面倒くさがりのレオにとってはラッキーな事であった。

「とりあえず、あの連中が来る前に街に出よう」

「……そういや、いつ家行くんだ？」

「もうちょっと色々見たいから」

「ふーん」

興味なさげに返事をし、リノの分の鍵を受け取つて纏めてカウンターに出す。

相変わらずの笑顔でディルクが鍵を受け取り、2人は街に繰り出した。

そして一秒もせずにトラブルに遭遇するあたり、やはりそういう体質なのだろうか。

「じきなさい、小娘」

パンツスーツ姿、濃いピンクに青メッシュを入れたショートヘアの眼鏡の女性。

整った顔立ちではあるものの、今はその赤い瞳から冷たい怒りが滲み出ている。

「ああ？ アンタが謝るまでどかないつづんでしょ」

こちらに背を向けているものの、茶色のショートカットで腰に剣を提げた女性などそうそう居ない。間違いない、つい先日会った人間だった。

「じ、ジーナ……やめましょう、こんな……」

「ああ？ いいっての？ レマリーが泣かされてんのよ」

「あ、あのっ、自業自得ですから……っ」

「あたしが納まり付かないのよー。」

その後ろで縮こまる2人にも見覚えがありすぎる。

リノは思わず深く溜息を吐き、レオの服の背中を握つて頃垂れた。

「逃げよ！」

「うん？」

しかし声を出したのが運の尽きた。

怒りの空気が霧散したかと思うとスースの女性 ヴィヴィアンの姿が搔き消える。もう片方の女性、ジーナが焦ったようにぱっと振り向いた。

跳んだ方向が分かつただけでも凄い事ではあるのだが、既にそこには居ない。

「『』主人さまあああああっ！ どうしてお逃げになるんですの？」

「いやー……えーと」

「私っ、私……会いたくて会いたくて会いたてもういてもたつても！ ああご主人様あつ、そんなつれない子猫ちゃんのよつな態度はおやめくださいませ！」

「『』めん今すぐこい鳥肌立つた」

阿呆らしいやり取りをしながら、周りには出たり消えたりしているとしか思えない速度で逃げ回るリノと、速度では敵わないのに何故かきつちり捕捉して突撃するヴィヴィアン。

愛はステータスを上回るらしく、20秒ほどで捕獲される。すりすりと頬擦りを繰り返し、髪を掬い上げて匂いを嗅ぎ、抱き上げて首筋に顔を埋めて深く吸い込む。

「……」

死んだ魚のような田でリノがぴくりとも動かなくなつた。

「田で追う事すら出来ないなんて……」

「じ、ジーナ、無理はありませんわ」

「あれって瞬間移動じゃないんですか」

一方のジーナは膝を付いて己の無力を悔やんでいるが、それすらリノの田には全く入っていない。レオはここまで死にそうな顔をしているのも珍しい、と場違いにも感心していた。

「どうすつかな」

混沌とした空間。

レオはとりあえず路上で変態行為に勤しむピンク頭から幼馴染をどうやって引き剥がそうかと思案し始めたのであった。

幼馴染と遊び人（後書き）

結構ドライで面倒臭がり。少年漫画には向かない系。

たぶん第二の主人公です。
よろしくお願ひします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1876w/>

レイスタイルの遊び人

2012年1月13日13時47分発行